

# いわゆるラーピン論文と その公表直後の波紋

——執筆順序の問題を中心として——

岡 崎 栄 松

## 目 次

- [1] はじめに
- [2] 「第1草稿」の執筆順序（その1）
- [3] 「第1草稿」の執筆順序（その2）
- [4] エンゲルス「大綱」の摘要（その1）
- [5] エンゲルス「大綱」の摘要（その2）
- [6] 「パリ・ノート」と『経哲草稿』との関連
- [7] 「ラーピン論文」公表直後の波紋

## [1] は じ め に

ソ連の経済学者エヌ・イ・ラーピン（Н. И. Лапин）は、1968年、『若きマルクス』（Молодой Маркс, Москва）を公刊したが、この書物の第6章は「共産主義の経済学的・哲学的基礎づけ」という表題をもっていた。そしてこの章は、4ページ程度の「前文」と七つの節から成っているのだが、ラーピンは、そのうち「前文」と最初の二つの節、すなわち第1節「マルクスの経済学研究の開始」および第2節「所得の三源泉の分析」という節を基礎にしなが、それらに加筆・削除・補筆などをくわえて一つの独立論文に仕上げた。これに彼は、「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」

(Vergleichende Analyse der Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx) という題名をつけて1969年2月、それを『ドイツ哲学雑誌』（*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Jg. 17, Heft 2）に掲載・公表したのであった。これが、ここでとりあげようとする「ラーピン論文」にほかならない。<sup>(注)</sup>

(注) ちなみに、この論文の母体である『若きマルクス』は、1974年、改訂増補ドイツ語版 *Der junge Marx* がベルリンで刊行された。また1976年には、そのロシア語改訂増補再版 *Молодой Маркс. Издание второе, переработанное и дополненное* が出版された。

ところで、この「ラーピン論文」は、それが『ドイツ哲学雑誌』に発表されたから約2年後に、細見英氏によってその翻訳が雑誌『思想』1971年3月号に掲載されたが、これよりさき1970年8月、細見氏は、本誌『立命館経済学』第19巻第3号に「『経哲草稿』第1草稿の執筆順序——N. I. ラーピン論文の紹介——」という表題のもとに、そのかなり詳しい紹介論文を発表された。氏はこの点について同紹介論文の冒頭で次のように述べておられる。——「この夏（1970年夏）、『経済学史学会年報』第8号に収録する文献抄録の分担分として、名古屋大学の水田洋氏から私に割りあてられてきた六点の外国文献のなかに、『ドイツ哲学雑誌』1969年2月号所収のN. I. ラーピンの論文、『マルクスの「経済学・哲学草稿」における所得の三源泉の対比的分析』が含まれていた。1年半もまえに発表されたものなのに、うかつにも私はそれまでこの論文の存在に気づいていなかった。読んでみると、ひじょうに有意義な好論文である」（前掲『立命館経済学』誌、62ページ）。

さらに細見氏は、この論文を紹介しようと思いたった事情について、ひきつづき次のように書いておられる。「[この『ラーピン論文』は] とくに、(1) マルクスの『経済学ノート』と『経哲草稿』の関係、(2) 『経哲草稿』第1草稿の執筆順序、この二点について、ユニークで示唆にとむ内容をふくんでいる。『経済学史学会年報』の文献抄録は、一つの論文をわずか200字で要約することになっており、ラーピン論文については相当オーバーして抄録しておいたものの、

当然ながらほんの骨子を摘記するにとどまった。『経哲草稿』はもとより『経済学ノート』についても関心が高まっている今日、ラーピン論文はこれらの研究に役立つところが少なくないと思うので、あえてこの誌面をお借りして、やや詳細な紹介をこころみる次第である」（同上、62ページ）。

こうして細見氏は1970年8月の時点で、「ひじょうに有意義な好論文」と思われた「ラーピン論文」の内容を、（1）『経済学ノート』と『経哲草稿』、および（2）第1草稿の執筆順序、という二つの節に分けて相当に詳しく（印刷ページ21ページ）かつ手際よく紹介されたが、その後、氏はさらに、ラーピンの研究成果はもっと広く知ってもらうほうがよいと判断し、こんどは「ラーピン論文」そのものを全訳してそれを『思想』誌上に掲載・公表することにしたのであった。この間の事情について氏は、全訳に先だつ「訳者まえがき」のなかで次のように記しておられる。「ラーピンのこの論文を私は、昨年〔1970年〕の夏、『経済学史学会年報』第8号に収録する文献抄録のために水田洋氏から割りあてられてはじめて読んだ。そしてさっそく紹介の小文を書いたのだが（『立命館経済学』第19巻第3号所収）、ラーピンの研究成果はより広い読者に全訳のかたちで提供するに値いするものと考えて、本誌〔『思想』〕の紙面をさいていただくことにした次第である」（前掲『思想』誌、岩波書店、1971年3月号、「訳者まえがき」102ページ）。

さて私は、拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について——『ラーピン論文』公表以前を中心として——」（『立命館経済学』第39巻第1号、1990年4月所収）のなかで、「ラーピン論文」の公表が初期マルクスの研究、とくに「パリ・ノート」と『経哲草稿』の研究分野にひきおこした波紋を示すための、いわば予備作業として、同論文公表以前のこの分野での研究状況を——とくに執筆順序の問題に焦点を合わせながら——立ち入って見ておいたが、本稿はそれを前提として、「ラーピン論文」の公表とその波紋のひろがりやを跡づけることを課題とするものである。いいかえれば、前記拙稿をうけて、そこでは留保されていた問題、すなわち「ラーピン論文」とはいったいどういう内容・特徴をもち、どういうメリットをもつものであったか、そして、その公

表はわが国における「パリ・ノート」および『経哲草稿』の研究にどのような影響をおよぼし、どのようにその波紋をひろげていったか、といった諸点を——やはり執筆順序の問題を中心に据えながら——立ち入って検討しておこうというわけである。ただし、「ラーピン論文」の出現がその波紋をひろげてゆくプロセスを辿るといっても、本稿では紙巾の制約上、その期間をその公表直後（1971年末まで）に限定せざるをえない。この点はあらかじめ断っておかねばなるまい。

もとより、執筆順序というような書誌学的考察は、それ自体が目的をなすものではありえない。しかし、服部文男氏も力説されているように、「不十分なし不正確な書誌学的知見にもとづく理論的考察は、空虚な思弁にみちびくおそれなしとしない」（同氏『マルクス主義の形成』青木書店、1984年4月、208ページ）し、また、とくに「パリ・ノート」や『経哲草稿』の場合には、「理論的研究の進展にともなって、つねにその資料的根拠を問い直す必要があるように思われる」<sup>(注)</sup>（同上、208ページ）のである。

（注） こうした「書誌学的研究」の重要性は、服部氏が折にふれて強調されるところであって、前掲書の別の個所では、氏は次のようにも述べておられる。「いずれにせよ、これらの作業〔執筆時期の推定や先後関係の確定というような作業〕は、一見すると重箱の隅をつつくようなものなので、その重要性が一般に認められているとはいいがたいが、じつは、内容そのものを論ずる以前に、まずなされていなければならない基本的な作業なのである」（前掲書、117ページ。力点——引用者）。さらに、こうした点については前掲書124ページ、および117—118ページをも参照されたい。なおまた、拙稿「服部文男著『マルクス主義の形成』について」（『立命館経済学』第34巻第1号、1985年4月、99—100ページ）および上記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」（前掲誌4ページ）参照。

## 〔2〕 「第1草稿」の執筆順序（その1）

「ラーピン論文」の内容については、上記の細見氏の紹介論文や山中隆次氏の「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係——ラーピン論文によせて

——」（雑誌『思想』1971年11号所収）など優れた論稿がすでに発表されており、また前述のように、細見氏の手になる「ラーピン論文」そのものの全訳も『思想』誌上に公表されているので、ここでは改めてその細目にわたる内容紹介をおこなうことは不必要であろう。だから私は、上記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」のなかでの考察で明らかとなった諸事項との関連において、以下、三つの論点に絞ってラーピンの所説を見てゆくことにしよう。——(1)「第1草稿」の執筆順序の問題、(2)エンゲルス「国民経済学批判大綱」からの摘要の問題、(3)「パリ・ノート」と『経哲草稿』との関連の問題。

ところで山中氏は、その前掲論稿のはじめの部分で次のように書いておられる。「筆者はこのラーピン論文からも刺戟を受けて、最近、アムステルダムの『社会史国際研究所（Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis）』に所蔵の、これらマルクスの『抜粋ノート』および『経済学・哲学草稿』オリジナルをフォトコピーを通して調査研究し、前記ラーピンの『文献考証的な分析』を追試するとともに、それを補完する必要のある二・三の成果を得てきた。本稿はその sachlich な研究の一端の紹介である」（前掲『思想』1971年11月号、105ページ）。

つまり山中氏は、「パリ・ノート」および『経哲草稿』のオリジナル原稿を所蔵しているオランダの「社会史国際研究所」に直接赴いて、ラーピンの言説をつぶさに調査・検討し、その成果を上記論文にまとめられたわけである。だから山中論文は、氏自身が述べているように、「ラーピン論文」を「追試」・「補完」したものといってよい。両論文のこのような関係にかんがみて、以下、私はラーピンの所説を紹介するさいに、必要に応じて随時、山中論文を援用させていただくことにする。

さて、われわれは第1の問題、すなわち「第1草稿」の執筆順序の問題にかんするラーピンの所論を見るまえに、まず、いわゆる旧メガ第1部3巻（Karl Marx/Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 3（= MEG <sup>①</sup> A, I/3）, Berlin, 1932）の編集長ヴェ・アドラツキーの「序説（Einleitung）」における次の一文を引いておくことから始めよう。

「エンゲルスが『資本論』第2巻への『序文』で確言しているように、マルクスは『自分の経済学研究を、偉大なイギリス人やフランス人のものから1843年にパリで始めた』のであった。この研究の最初の成果をありありと示しているのが、この巻の諸材料である。すなわち、労賃、資本利潤、地代、貨幣、等々についての、一部は断片的な諸論稿——それらをわれわれは『経済学・哲学草稿』としてまとめ、こうして初めて完全な形で印刷に付する。そしてさらに、古典的な国民経済学者たちの著作からの老大な抜粋があるが、そのうちからわれわれは選択をして公表する。これらは上述の諸論稿〔つまり『経哲草稿』〕と直接関連して興味深く、その〔『経哲草稿』の〕直前の段階のものとして、それらはマルクスの仕事ぶりを特徴づける実例を提供するものである」(MEG<sup>①</sup> A, I/3, SS. XII-XIII. 力点——アドラツキー、ゴシツク——引用者)。

ここで「古典的な国民経済学者たちの著作からの老大な抜粋」とあるのは、パリ時代のマルクスが1844年のはじめから1845年のはじめに至るほぼ1年間に、若干の中断期間を伴ないながら、作成した9冊の抜粋ノート——いわゆるパリ・ノート<sup>(注)</sup>——のことである。また、アドラツキーをはじめとする旧メガI/3編集部によって『経済学・哲学草稿』と名づけられた「諸論稿」は「序文」、「第1草稿」、「第2草稿」、「第3草稿」および「第4草稿」という五つの部分から成っていたが、このうち「第4草稿」はヘーゲル『精神現象学』最終章「絶対知」からのたんなる抜粋に近いものとして、第I部第3巻末尾の「付録」中に収録された。そして同編集部は、『経哲草稿』全体への「まえがき」のなかで、これらの草稿を編成するさいの方針を次のように説明していた。——「第1から第3までの順序を立てるにあたっては、個々の草稿の推定成立期を基準にした。しかし例外として『序文』は、たしかに1844年8月より以前ではなく、つまり第1、第2と、そして第3の大部分よりものちに書かれたにちがないのだが、しかしわれわれはこれを内容上の諸理由から全体の先頭に置くことにする。さらに、ヘーゲル哲学にかんする批判的補説は第3草稿中の三つの個所に挿入されているものであって、たしかにこの稿に含まれていた経済学上の論述と同時に成立したのだが、マルクスの『序文』から明らかなように、

彼はこれを終章とするプランだったのであるから、一個所にまとめて最後に置くことにした」（Ebenda, S. 30. 力点——引用者）。このように旧メガ I/3 編集部は、「序文」や「ヘーゲル哲学にかんする批判的補説」など若干の例外を除いては、「個々の草稿の推定成立期を基準に」して『経哲草稿』を編集したと強調していたのであった。

（注） この「パリ・ノート」（「ノート I」～「ノート IX」）の詳細については、杉原四郎・重田晃一訳『マルクス・経済学ノート』未来社、1962年、とくに7-26ページ、および上記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」前掲誌、5-9ページを参照されたい。なお「ノート IV」中の「アテナイのクセノフォンからの抜粋」は1845年、ブリュッセルで執筆のものとして旧メガ I/3 には収録されていない。

そのうえで旧メガ編集部は「第1草稿」にかんして次のような「外面的な記述」をつけた。少し長いが、そして上記拙稿でも引用した文章であるが、行論の都合上、下に引いておこう。「第1草稿は九枚のフォリオ全紙<sup>フォーゲン</sup>（18葉、36面）の束から成り、マルクスは、ローマ数字でページづけ（I～XXXVI）をして、これを一冊のノートにまとめている。どのページもすべて、まだ本文を書くまえに二本の縦線を引いて三つの欄に区分されており、たいていの場合、次のような表題がつけられている（左から右へ）。——『労賃』、『資本の利潤』、『地代』。これらの表題も、同じく本文よりも以前に書きつけられたもので、ほとんどすべてのページで同じである。それゆえ想定されることは、マルクスは三つのテーマのおのおのにはほぼ同じ長さの論述をあたえようと意図していたということである。けれども、この計画された平行〔的記述〕は、のちにしばしば妨げられて中断されたように見える。XXIIページからは、この三欄分けも表題もすっかり意味を失ってしまい、本文は三つの欄すべてにまたがってかまわず書き続けられており、われわれは、その内容にしたがって『疎外された労働』という表題をつけた。第一草稿は XXXVII ページで中断されている」（Ebenda, S. 38）。

ここで旧メガ編集部は、「どのページもすべて、まだ本文を書くまえに二本の縦線を引いて三つの欄に区分されており」云々と記述しているが、こういう

ことがいえのは、せいぜい XII ページまでについてのことである。というのは、XIII ページからは欄分割の仕方や見出しの順序などの点で、さまざまなヴァリエーションが出てくるからである。なお、上掲の「外面的な記述」では、あたかもマルクスのページづけは I~XXXVI であるかのように書かれているが、実際には彼自身によるページづけは、本文の執筆部分 I~XXVII ページまでであって、あとは空白のまま放置されている。

それはそれとして、旧メガ第 I 部第 3 巻の編集部は『経済学・哲学草稿』を出版するにさいして、「序文」につづけて「第 1 草稿」に次のような「目次」を付したのであった。

序文

「第 1 草稿」

労賃

資本の利潤

- 1 資本
- 2 資本の利得
- 3 労働にたいする資本の支配および資本家の動機
- 4 資本の蓄積と資本家間の競争

地代

〔疎外された労働〕

上記のうち二種の括弧「 」および〔 〕内の見出しは、マルクス自身のものではなく、いずれも旧メガ編集部によるものである。

ところで、『経哲草稿』全体への「まえがき」において旧メガ編集部が、編集にあたっては「個々の草稿の推定成立期」を「基準」にしたと強調していたことを念頭に置きながら、「第 1 草稿」への「外面的な記述」を読み、また上掲の「目次」部分を見ると、「第 1 草稿」は次のような順序で執筆されたと考えるのが、ごく自然なことといえよう。すなわち、マルクスは「第 1 草稿」をまず「労賃」欄から書きはじめ、その欄を終りまで書きうずめてから「資本の利潤」欄の執筆に移り、その欄を書き終えてから、こんどは「地代」欄にとりかかり、そして最後に XXII—XXVII ページの〔疎外された労働〕部分を書

いた、というように。また事実、旧メガ I/3 編集部は『経哲草稿』の「第1草稿」をこのとおりの順序で印刷したのである。こうして、「第1草稿」にかんする上のような執筆順序が、当然のこととして一般読者のいわば固定観念にまでなっていたのであった。そして、まさにこの固定観念を打破したところに、「ラーピン論文」の大きなメリットがあったといえよう。

（注）ここでわれわれは、デ・イ・ローゼンベルクほどの大家までもが、こうした固定観念にとらわれていたことを想起すべきである（さしあたり上記拙稿、前掲誌 22—23ページ参照）。たとえば、ローゼンベルクは『経哲草稿』「第1草稿」について、「経済学にかんする草稿を、マルクス＝レーニン主義研究所のドイツ語版に発表されている順序で考察しよう。この順序にしたがって、マルクス自身が『賃金』という表題をつけた草稿からはじめよう」（Д. И. Розенберг, *Очерки развития экономического учения Маркса и Энгельса в сороковые годы XIX века*, Москва, 1954г., стр. 99. 副島種典訳『初期マルクス経済学説の形成』大月書店、改訳版、1971年、上巻、144ページ。力点——引用者）といっている。しかし、彼がこのように「マルクス自身が『賃金』という表題をつけた草稿」なるものについて語る場合には、あたかも「賃金」という見出しのついた独立の草稿があるかのようであり、また、それとは別に、「資本の利潤」とか「地代」という見出しのついたそれぞれ独立の草稿が存在するかのようである。この場合、マルクスのオリジナル原稿が縦線による三欄分割や二欄分割などの形で書かれている点を、ローゼンベルクが十分にふまえているのかどうか、はなはだ疑わしいといわざるをえない。

さて、ここでわれわれは、「ラーピン論文」の訳者である細見英氏が、その「訳者まえがき」のなかで、「1843年末から44年夏にかけてのマルクスの経済学研究の歩み」を「ラーピンの説く順序」にもとづいて整理・作成した「段階」＝および「階程」区分のシェーマを示しておくことにしよう（前掲『思想』385—386ページ参照）。

#### 「第1段階」

- (イ) エンゲルス、プルドンらの経済学的著作との最初の出会い
- (ロ) 「ノートⅠ」～「ノートⅢ」の作成（セー、スカルベク、スミスからの抜粋）
- (ハ) 「第1草稿」前段での所得の三源泉の対比的分析

「第1階程」（草稿Ⅰ—Ⅶページ）

「第2階程」（草稿Ⅷ—ⅩⅥページ）

## 「第3段階」（草稿 XVI—XXIページ）

(二) 「第1草稿」後段〔疎外された労働〕断片（草稿 XXII—XXVIIページ）

## 「第2段階」

(イ) 「ノートⅣ」, 「ノートⅤ」(リカードウ, J. ミル, マカロックらからの抜粋と評注。エンゲルス「大綱」の摘要)

(ロ) 「第2草稿」

(ハ) 「第3草稿」

エヌ・イ・ラーピンは、およそ上のような図式（「段階」区分および「階程」区分）を念頭に置きながら、「第1草稿」前段部分について次のような問いを発する。「第1草稿前段部分の各ページにみられる平行した三つの欄を、マルクスは現実にはどのような順序でうめていったのか？ だが、『疎外された労働』断片はこれらの文章にすぐつづけて書かれたのだから、上述の文献考証的な問題を解くことは、深く内容にかかわる問題、すなわち、マルクスの思惟の歩みは現実にはどのような道をとって、1844年草稿のあの中心カテゴリーの成立へとすすんでいったのか、という問題を解くカギを提供する」(N. I. Lapin, Vergleichende Analyse der drei Quellen des Einkommens in den „Ökonomisch-philosophischen Manuskripten“ von Marx, *Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, Jg. 17, Heft 2, 1969. S. 200. 細見英訳「マルクス『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」『思想』1971年3月号, 105—106ページ。力点——ラーピン)。

そしてラーピンは、みずからが発したこの問いにかんして次のように論述する。「この問題を解くためには、すでに以前にのべたように、内容的分析と文献考証的分析とを結合しなければならない。草稿のフォトコピーをじかに検討するとき、第1草稿の素材の配列についてこれまでおこなわれてきた説明は不正確である、という結論に達する。……この説明から研究者たちは、三つの断片はいずれも正確に予定の場所に収まっているものと結論し、そしてこうした素材配列の厳密な平行性は、三つの断片の執筆順序——『左から右へ』の、すなわち、まず労賃にかんする左の欄全部が書かれ、ついで資本の利潤にかんするまん中の欄全部が、そして最後に地代にかんする右の欄全体が執筆された

——を推測させるものにはかならないと結論した。実際この草稿は、いつでもこの順序で発表され研究されてきたのである」（Ebenda, S. 200. 前掲訳「対比的分析」, 106ページ）。

こうした一般的通念ないし固定観念にたいして、ラーピンは、「素材の現実の配列は……二つの点で本質的な逸脱を示している」として、つぎのようにいう。「(1) [マルクスのオリジナル原稿] VII ページは、他のページと同じくあらかじめ三つの違った表題のつけられた三つの欄に区切られているけれども、にもかかわらず本文は、一つの項——労賃の項——だけにかんする文章でうめられている。この項の著者 [マルクス] 自身の言葉で書かれた本論は、すでにこのページで終わっている。(2) XIII—XVI ページは、三つの欄でなく、あらかじめ『労賃』と『資本の利潤』という表題がつけられた二つの欄に分かれている。本文もこの二つの項だけにかんするものである（労賃の項の文章は XV ページで終り、利潤の項の文章は XVI ページで終わっている）」（Vgl. ebenda, SS. 200—201. 前掲訳, 106ページ）。

ラーピンは、オリジナル原稿のこうした状態からして、VII ページ<sup>(注)</sup>と XV—XVI ページとを「第1段階」の「二つの信ずべき里程標」だとする。そのうえで彼は、マルクスの「対比的分析」の作業を次のような「三つの主要階程」に区分する（Vgl. ebenda, S. 201. 前掲訳, 106—107ページ参照）。

#### 「第1階程」

「労賃」論の前半（I—VII ページ）

「資本の利潤」論の前半（I—VI ページ）

「地代」論の初めの部分（I—VI ページ）

#### 「第2階程」

「労賃」論の後半（VIII—XV ページ）

「資本の利潤」論の後半（VIII—XVI ページ）

「地代」論の続きの部分（VIII—XII ページ）

#### 「第3階程」

「地代」論の最後の部分（XVI—XXI ページ）

（注） この VII ページについて山中隆次氏は、つぎのように記述しておられる。「こ

のページは、第1「草稿」前段の所得三源泉に対するマルクスの対比的分析の『第1階程』を閉じるページとして、ラーピンの重視するところである。たしかに、ラーピンのいうように、あらかじめ付けられた三つの表題と欄を無視して、『労賃』に関する内容だけが書かれている（上記・山中論文、前掲誌、107ページ）。

つまり山中氏は、このように述べて、ラーピン説を「追試」・「補完」されるわけである。

### 〔3〕「第1草稿」の執筆順序（その2）

ところでラーピンは、上掲の「階程」区分には「留保しておかなければならないこと」があるとして、つぎのように書いている。「というのは、さきに確認した二つの里程碑によっても、作業階程の境界を行数についてまで正確に確定することは必ずしもできないことである。しばしばマルクスはある項の叙述を中断して、その欄を最後までうめていない。そして、つぎにその中断した文章にたちもどるとき、彼は前に書いた文章にすぐつづけて、同じ欄で、新しい階程の作業を始めている。このような場合、前の文章と新しい文章の内容上ならびに筆跡上の特徴によって、たいていは、確実に二つの階程の境界をつきとめることができるけれども、ときにはこのような確実さの存在しないこともある。このことは、とくに『資本の利潤』論と『地代』論の第1階程と第2階程についてあてはまる」（Ebenda, S. 201—202. 前掲誌、107ページ）。

われわれは、ラーピンのこの文章については、あとで改めてとりあげることにして、さきへすすもう。ラーピンは、「第1草稿」前段における例の三欄分割の文章にかんして「マルクスは現実には、三つの文章のどれから対比的分析を始めたのか？」（力点——ラーピン）と問い、これにたいして次のように答える。——「実際、作業の第1階程は、労賃の項の本文のほとんど全部、ならびに資本の利潤の項の第1、2、3節と第4節の始めの部分、さらにその上に、地代に関する叙述の始めの部分を含んでいる。だが、いかにマルクスでも、これらの文章全部をいっぺんに書くことはできない！ ではどこから書きはじめ

たか？ 労賃の項が一番左に（この意味では最初に）おかれており、しかもまとまった叙述になっているために、普通には、まさしくこの項からマルクスは草稿を書きはじめたと考えられている。しかしながら、文献考証的分析はこの推定をくつがえす」（Vgl. ebenda, S. 202. 前掲訳, 107—108ページ参照。力点——引用者）。

このように述べてラーピンは、「こうした分析の手がかりになる二、三の事実」を列挙したのちに——残念ながら、ここではこれらの「事実」にいちいち言及することは割愛せざるをえないが——つぎのようにいう。「同一の経済現象にかんするマルクスの修得水準のちがいが（第1階程における）を反映する、これと同類の事実を、すくなくとも十二は数えあげることができる。(イ)資本の利潤と地代の項では、マルクスは、スミスの分析のもっとも重要な結論のいくつかを、ほとんどスミス自身の叙述どおりに自分の抜粋ノートから（「経験的基礎」として）ひき写している。もっとも、マルクスの叙述の全体のプランが命ずる別のコンテクストにおいてではあるが。(ロ)労賃の項ではマルクスは、すでにこれらの結論を自分自身の思考の歩みに有機的に組みこむという、より高い段階に達している」（Vgl. ebenda, S. 203. 前掲訳, 108ページ参照）。

こうしてラーピンは、「左から右へ」という一般的な通念にはなく、「事柄の論理」にしたがって、「対比的分析の第1階程」において「労賃」欄の文章は「資本の利潤」欄および「地代」欄のそれよりもあとから書かれたのだと結論する（Vgl. ebenda, S. 203. 前掲訳, 109ページ参照）。そして、こんどは「資本の利潤」欄と「地代」欄のうちマルクスが先に手をつけたのはどちらだろうかと設問する。この設問にたいしてラーピンは、両欄のはじめの部分における引用典拠（セー『経済学概論』およびスミス『国富論』）や引用の仕方などを立ち入って吟味・考証しながら、結局、「地代」欄の記述（引用）は「資本の利潤」欄での論究から派生したものであり、だからまた、マルクスが先に着手したのは「資本の利潤」欄であって「地代」欄はそのあとだという結論に達したわけである。

つづけてラーピンは、「内容的分析から得られた以上の結論は、原文の筆跡

上の若干の特徴によって確認される」として、つぎのようにいう。「資本の利潤の項の原文は、あとから書かれた労賃の項の原文とくらべて、どんな原稿でも最初の部分がそうであるように、いくぶんゆったり書かれている（字間も行間も広い）。これにたいして第2欄と第3欄の最初の数行はよく似た筆跡で書かれており、このことは両者の執筆の『同時性』を裏づける。他方、資本の利潤の欄には他の二つの欄よりも大きなスペースがさかれているのだが、著者はこのことを、最初のページ<sup>(注)</sup>では一見して特徴的なやり方でおこなっている。というの、〔第2欄と第3欄を区切る〕最初にひいた線の右側に、もう一本太い線をひいて、第3欄を犠牲にして第2欄のスペースを拡げているのである。そして第2欄の原文は、このスペースいっぱいには書かれている。このことは、かさねて、第2欄の文章こそこの草稿が着手された最初の文章であることを示している」（Vgl. ebenda, S. 204. 前掲訳, 110ページ参照。力点——ラーピン）。

（注）この最初のIページについて山中隆次氏は、その調査結果を次のように報告しておられる。「……表題は左から右へ『労賃』『資本金利潤』『地代』。ただし三つの欄に分けている二つの境界線のうち、『資本金利潤』と『地代』の二欄を画する境界線は、ラーピンの主張するように、そして、MEGA, vor S. 39の写真版からも識別できるように、『資本金利潤』と『地代』の間に最初にひいた境界線の右側に、もう一本新しく縦線がひかれ、したがって『地代』欄を犠牲にして、『資本金利潤』の内容がゆったりと書かれている。このことは、すくなくとも執筆順序における『資本金利潤』の『地代』に対する先行性を裏付けるものである。また、ラーピンの注目する『資本金利潤』欄と『地代』欄の両者にみられるマルクスの『筆跡』（むしろ筆勢というべきか）の類似性にも、あえてふれるならば、それをほぼ確認することができるといわざるをえない。しかし、以上の形式的な文献考証だけでは、『資本金利潤』→『地代』の執筆順序はいえても、それらのあとに、つまり最終が『労賃』というラーピンの主張に関しては何とも断定できず、それは内容的分析をまつほかないであろう」（上記・山中論文、前掲誌、106—107ページ）。

見られるように、山中氏は、「第1草稿」前段の「第1階程」のはじめ部分（マルクス・オリジナル原稿Iページ）にかんするラーピンの考証的立言を全体としては追認されるのだが、最後の文章から知られるように、氏は「資本金利潤」→「地代」の執筆順序はいえても、さらにすすんで「地代」→「労賃」という順序については「何とも断定できず、それは内容的分析をまつほかないであろう」とされる。だが、ラーピン自身は、この「内容的分析」の点——この点の紹介はさきに述べて

おいたように、割愛せざるをえないのだが——でも自信満々のようで、上の本文の最後のところで引用した文章にすぐつづけて、「以上にのべたすべてからひきだせる結論は、1844年草稿をマルクスは「資本の利潤」断片から書きはじめた、ということである」（Ebenda, S. 204. 前掲訳, 110ページ。力点——ラーピン）と力説している。

ところで、新しい縦線を引いて欄のスペースをひろげるという手法の点で、山中氏は興味深い事実を報告しておられる。それは、問題のⅦページの1ページまえ、つまりⅥページにかんしてである。「……このページは、ラーピンがみずからの『利潤』先行説を裏付けようとした p. I ときわめて対照的な特徴をもっている。というのも、ここでは『労賃』欄と『利潤』欄を区別する、最初にひいた縦線の右側にもう1本新しく縦線がひかれ、したがって『利潤』欄を犠牲にして、『労賃』欄の内容がゆったりと書かれているからである。これは執筆順序として『利潤』に対する『労賃』の先行性を明確に示すものであり、さらに、あえてマルクスの筆勢にまで言及するならば、ここでは p. I のような『利潤』と『地代』でなく、『労賃』と『地代』の間の類似性がみられ、『利潤』は孤立の感じである」（上記・山中論文, 前掲誌, 107ページ。力点——引用者）。

ところでラーピンの見解では、「第1階程」は「資本の利潤」欄の場合、マルクスのオリジナル原稿Ⅵページまで（そしてⅦページから「第2階程」がはじまる）ということであった。これは、マルクス自身がつけた見出し(3)「労働にたいする資本の支配および資本家の動機」までの本文全体と、(4)「資本の蓄積と資本家間の競争」のはじめのほう僅か（五パラグラフ）とを含むということになって、いかにも不自然の感をまぬがれなかった。<sup>(注)</sup>ここでわれわれは、ラーピン自身、上掲の引用文において「……たいていは確実に二つの階程の境界をつきとめることができるけれども、ときにはこのような確実さの存在しないこともある」といい、また「このことは、とくに『資本の利潤』論と『地代』論の第1階程と第2階程の境界についてあてはまる」（前出）と表白していたのを想起すべきである。私の見るところでは、しかしラーピンの「階程」区分の不明確さは、とりわけ「利潤」欄の「第1階程」と「第2階程」の区分につい

て「あてはまる」ように思われる。

（注）新メガ第Ⅰ部第2巻（編集責任者はインゲ・タウベルト）では『経済学・哲学草稿』が二様の形で印刷されている。すなわち、「成立段階」に基づいて編集された「第1の再版」と、何よりもまず「論理的構造」を基礎とした「第2の再版」とがそれである（Vgl. Karl Marx/Friedrich Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 2 (=MEGÄ, I/2), Berlin, 1982. S. 57\*. —この\*印は前付ページであることを示す）。ここで私がとりあげるのは前者、すなわち執筆の時間的順序にしたがって編集された「第1の再版」のほうであるが、これによると「資本の利潤」欄がマルクスの見出し(3)「労働にたいする資本の支配および資本家の動機」の終りまでで「利潤」欄がひとまず区切られている（この場合には、オリジナル Vページの「利潤」欄が少し余白を残し、同 VIページのそれは完全に空白となる）。そして「利潤」欄は、(4)「資本の蓄積と資本家間の競争」という見出しのもとで Vページの残余の部分から再開され、例の VIページの部分を飛ばして VIIページ、IXページへと書きつづけられるということになる（Vgl. MEGÄ, I/2, SS. 202—203, S. 208）。しかし、このほうが私には自然のように思われる（この点、広松渉氏も同じ見解をもっておられるようである。——同氏『青年マルクス論』平凡社、1971年、226—227ページ参照）。というのは、この場合には VIページの「利潤」欄は全体にわたって空白だったのだから、山中氏のいわれるように、「最初にひいた縦線の右側に、もう一本新しく縦線がひかれ、したがって『利潤』欄を犠牲にして、『労賃』欄の内容がゆったりと書かれている」のも、うなずけるし、また VIページの「筆勢」が「『労賃』と『地代』の間に類似性がみられ、『利潤』は孤立の感じある」というのも、納得がいくように思われるからである。この場合、マルクスは「資本の利潤」から執筆をはじめて「労賃」欄は最後に書いたという想定と抵觸するかに見えるが、私にはそうは考えられない。察するに、マルクスはラーピンのいうように、まず「利潤」欄から書きはじめて、Vページの前記のところまで書き、「地代」欄も VIページまで書き終えてから「労賃」欄に移り、Vページで「労賃」欄の要約をする過程で VIページのスペースをひろげるのを感じ、そこで同ページの左の縦線の右側にもう一本新たに縦線を引いて「労賃」欄のスペースをひろげることにしたのであろう。ちなみに、Vページの「労賃」欄の終り部分では、「こうして、社会の衰退しつつある状態では、労働者の累進的〔progressiv〕な窮乏が、進歩しつつある状態では錯綜した〔kompliziert〕窮乏が、完成した状態では停滞的〔stationärt〕窮乏があるのだ」（MEGÄ, I/3, S. 43. 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店、24ページ）といった要約的な文章がある。

さてラーピンは、「労賃」欄にかんして「対比的分析の第1階程のしめくくりとして、著者自身の言葉で書かれた『労賃』断片の主要部分こそ、この時期

にマルクスが第2、第3断片で凝縮させた具体的な経済的素材の理論的要約にほかならない」（Ebenda, S. 206. 前掲訳, 111ページ。力点——ラービン）といい、さらにⅦページを問題にしながらかのようになっている。「とりわけ興味深いのは、労賃断片のうち、著者自身の言葉で書かれた本文の完結部分である。この部分は、欄いっぱいにもたがる太いはっきりした線で、マルクス自身によってそれ以前の文章から区別されている。しかもこの部分は『正当でない場所に』——Ⅶページの第2欄と第3欄に——書かれているのであって、それゆえわれわれの時期区分からすれば、対比的分析の第1階程の最後に書かれた一節なのである」（Ebenda, SS. 206—207. 前掲訳, 112ページ）。

このようにラービンは、「Ⅶページの第2欄と第3欄」に「著者〔マルクス〕自身の言葉で書かれた本文の完結部分」に読者の注意をうながし、これこそが「対比的分析の第1階程の最後に書かれた一節なのである」と強調する。そして、ひきつづきラービンは、「あまり長いものではないが、この完結部分はそれ自体、いわば二つの部分からなっていて、それぞれちがった意義をもっている。はじめの五つのパラグラフは労賃断片の要約である。これにたいしてあとの数パラグラフでは、はじめて原理的に新しいことが見いだされる。すなわち、マルクスの視野にはいていた経済学の諸問題にたいする固有のマルクスのなアプローチが、はじめて見られるのである」（Ebenda, S. 207. 前掲訳, 112ページ。力点——ラービン）と指摘して、『経哲草稿』『第1草稿』からマルクスの次の文章を引用する。

「いまやわれわれは国民経済学の地平をのりこえて、ほとんど国民経済学の言葉で述べてきたこれまでの展開から、二つの問題に答えてみよう。

(1) 人類の大部分がこのように抽象的な労働へと還元されていることは、人類の発展においてどのような意味をもつか？

(2) 労賃をひきあげて、これによって労働者階級の状態を改善しようと望んだり、あるいは労賃の平等を（ブルードンのように）社会革命の目的と考えている社会改革家たちは、細かく立ち入ってみれば、どのような誤りをおかしているか？

労働は、国民経済学においては営利活動という姿でしか現われないようだ」(MEGA, I/3, SS. 45—46. 前掲訳書, 28ページ。力点——マルクス)。

Ⅶページ末尾のマルクスのこの文章についてラーピンは、「ここに提起されている問題は、そもそも社会にかんする二つの根本問題、すなわち人類史の発展方向の問題と、この方向をおしすすめる手段方策の問題とである」(Vergleichende Analyse., S. 207. 前掲訳「対比的分析」, 112ページ)として、さらに次のように主張する。「この問いは、突然出てきたものではない。それに先だつ分析の、とりわけ発展的社会における労働者の状態の分析の、結果として出てきたものである。だが問いたいする解答は、最初の文章で中絶している。まさしくその文章で、対比的分析の第1段階も終わっているのである。／どうしてそうなったのか？ 明らかにマルクスは、もっと多くの材料を利用つくすことなしには厳密な諸命題の定式化に移りえないことに、気づいたのである。事実、さっそく次のページ、Ⅷページから、労賃欄にはヴィルヘルム・シュルツ、コンスタンチン・ペクル、それにウージェーヌ・ビュレの著書からの長い抜粋が——最後まで——つづいている。とはいえ、マルクスが根本的に新しい自分の立場の論述にとりかかりながらそれを中断したのは、ほかならぬこれらの抜粋をおこなうためであったと考えるひとがあれば、それは早合点というものだ。／事態はこうだ。上にあげた著者たちの著作からの抜粋は、労賃の欄だけでなく、資本の利潤の欄でもおこなわれているのである。労賃の欄と利潤の欄で抜粋されている文献の順序には、これまた平行関係が見いだされる」(Ebenda, SS. 207—208. 前掲訳, 112—113ページ)。

このように指摘してラーピンは、この「文献の順序」の「平行関係」をとりあげながら、「利潤」欄の抜粋典拠は、シュルツ→ペクル→ビュレ→スミス→シュルツの順であり、他方、「労賃」欄の抜粋順序は、シュルツ→ペクル→ルードン→ビュレとなっており、両欄にほぼ「平行関係」がみとめられると強調する。そして、さらにすすんでラーピンは、「資本の利潤の欄では（作業の第2階程にはいつてから）、抜粋に先だつて著者〔マルクス〕自身の文章がおかかれている」（力点——ラーピン）ことを論拠として次のようにいう。「したがって、

対比的分析の第2階程は抜粋ではじまったのではないということになる。しかも第2階程の地代の項の文章には、上述した資本の利潤の項の著者自身の文章への明白な言及がふくまれているから、そのかぎり、この後者の文章こそ第2階程の事実上の発端でもあった」（Vgl. ebenda, SS. 208—209. 前掲訳, 113ページ参照）。

こうしてラーピンは、「第1階程」と同じく、マルクスは「第2階程」も「利潤」欄から書きはじめたとするわけである。しかし、「第2階程」の場合、そのあと二番目に書かれたのが「労賃」欄だったのか、「地代」欄だったのかは、必ずしも明確ではない。というよりも、「第2階程」の複雑な叙述形式の原稿について、その執筆順序を一義的に確定することは、文献考証的分析と理論内容の分析との結合を唱えるラーピンにとっても、けっして容易なことではなかったであろう。そこでわれわれは「第2階程」以降については、山中隆次氏の手になる、各ページごとのザハリッヒで綿密な調査研究の報告文を引用するにとどめておこうと思う。いささか長くなるが、VIIIページからXXVIIまでの「第1草稿」の「叙述形式」について同氏が説明するところを、ここでしばらく聞くことにしよう。

「p. VIII—XII……ここでは中央の『利潤』欄が各ページとも、その全体の約半分とスペースを大きくとって書かれ、他の『労賃』『地代』欄が狭められている。

p. XIII—XVI……この特徴は縦線が一本ひかれているだけで、『地代』欄が欠如していることである。もっとも p. XVI の左欄では表題の『労賃』が消されて『地代』と訂正され、内容的には p. XII の『地代』のつづきが書かれている。これは第1『草稿』前段での『労賃』に関する叙述が、その直前の p. XV で終了したからにはかからない。つづいて『利潤』欄に関する叙述も p. XVI で終了。なお p. XIII は、あらかじめ二つの欄を分ける境界線がひかれたのでなく、はじめに『労賃』に関する叙述が書かれ、その後に、この叙述のスペースに従って、隣接する『利潤』欄との境界線がひかれた形跡がみられる。これは p. XIII—XV の『労賃』欄にあるビュレからの引用文が、同ページの『利潤』欄にあるスミスからの引用文より先に書かれたことを示している。

p. XVII—XXI……ここでは一応三つの欄に、それぞれの表題が付けられているが、

埋められているのは『地代』欄だけであり、しかもそれは中央に位置し、スペースを大きくとっている。

p. XXII—XXVII……ここには…有名なく疎外された労働>に関する内容が、あらかじめ付けられた『労賃』『資本利得』『地代』の表題に関係なく、しかし、左から右への三つの欄に従って書かれている。各ページとも左上隅に×印が付されている（前掲・山中論文，107—109ページ）。

このようにマルクスのオリジナル原稿の特徴を詳しく説明したのち、山中氏は、「第1草稿」全体にかんする旧メガI/3編集部の「外面的な記述」を批判しながら、また「第1草稿」の執筆順序にかんするラーピンの所説を高く評価しながら、つぎのように書いておられる。——「第1『草稿』の叙述形式を概観していえることは、『全ページは本文執筆前に二本の縦線で三つの欄に分けられ』というMEGA編集者の説明は不正確であり、表題およびその順序に若干の例外があることを含めて、とくに第1『草稿』前段は、ラーピンの主張するように、必ずしも公刊された順序で執筆されたものでなく、かなり複雑な行程をたどっているといえよう。これの解明には右にみたような文献考証とならんで、ラーピンのおこなった内容的分析が必要なことはいうまでもない。ラーピンのそれには教えられること多く、とくに第1『草稿』前段の作業における第1階程と第2階程の区別は、『利潤』→『地代』→『賃金』という執筆順序の推定とともに、従来あまり注目されること少なかった第1『草稿』前段研究の盲点を衝き、それを飛躍的に高めた着眼点であるといえよう」（同上，108ページ）。

旧メガ第I部第3巻の「編集者の説明」と、「第1草稿」（とくに前段部分）の執筆順序にかかわるラーピンの主張のメリットについての、山中氏のこうした評言は、けだし、まことに当を得たものというべきであろう。<sup>(注)</sup>

(注) なお細見英氏は、本稿のはじめで言及した同氏のラーピン紹介論文「『経哲草稿』第1草稿の執筆順序」のなかで、「第1草稿」の執筆順序にかんするラーピン説を紹介したあとで、結論的にそれを評して次のように述べておられる。

「もちろん、いかにフォトコピーを手元におこうとも、マルクスの平行的な問題追究＝執筆の順序を完全に復元することは不可能であり、とうぜんながらいくばく

かの推定が介入することはさげがたい。そしてラービンのくわえている推定と、それにもとづく論点整理にも、なお不明確な点、検討すべき余地の残されていることもたしかである。とはいえ、『労賃』『利潤』『地代』の三項目の平行的記述が、マルクスによる問題追究の過程そのものの平行・交錯の反映であることを強調して、マルクスの分析的思惟の歩みを（細部はともかくとして）大筋において浮きぼりにした功績は、高く評価されてよいであろう」（前掲『立命館経済学』81ページ）。

「第1草稿」の執筆順序の問題をめぐる「ラービン論文」の意義と限度についての、ここに示されている細見氏の評言も、まさしく正鵠を射たものといえよう。

さて、われわれは、『経哲草稿』『第1草稿』（とくに、その前段部分）の執筆順序にかんするラービンの所論の考察については、以上をもって終ることにして、こんどはエンゲルス「国民経済学批判大綱」からの摘要の問題に移ろう。

#### 〔4〕 エンゲルス「大綱」の摘要（その1）

前記拙稿「いわゆるバリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」のなかですで見えておいたように、旧メガ第Ⅰ部第3巻ではエンゲルス「大綱」の摘要が、「ノートV」——これにはマカロック、デステュット・ドゥ・トランおよびJ.ミルからの抜粋と評注が含まれていた——のなかに、「紙片（ページづけはなし）<sup>①</sup>に書いて挿入されている」（Vgl. MEGÄ, I/3, S. 411, S. 413）と説明されたうえで、同巻の「経済学研究」（＝「バリ・ノート」）の部の冒頭に配されていた（上記拙稿、前掲『立命館経済学』6ページ、および8—9ページ参照）。そしてデ・イ・ローゼンベルクは、この「大綱」について次のように述べていた。「経済学者からの抜粋のまゝに、マルクスはエンゲルスの『大綱』の簡単な概要を置いている。これも偶然なことではない。マルクスは評注の大部分でエンゲルスのあとを追っており、ときには逐語的にすらそうしている」（Д. И. Розенберг, Очерки развития экономического учения., стр. 64. 前掲訳書『初期マルクス経済学説の形成』上巻, 94ページ。力点——引用者）。また彼は、こうも書いていた。「すでに指摘したように、マルクスは抜粋のまゝに、彼が作成した

エンゲルスの『大綱』の概要を置いている。この概要は同時に、ある程度マルクスの批判的評注の序論でもあり、また、彼がとくに初期に、評注をつけるにあたって堅持したプランでもある」（Там же, стр. 65. 前掲訳書, 上巻, 95ページ。力点——引用者）。

たしかにマルクスが、「パリ・ノート」の作成にあたってエンゲルス「大綱」から格段に強い影響を受けていたことは、疑問の余地がない。しかし、ここでローゼンベルクが、「経済学者の著作からの抜粋のまゝに、マルクスはエンゲルスの『大綱』の簡単な概要を置いている」とか、「マルクスは抜粋のまゝに、彼が作成したエンゲルスの『大綱』の概要を置いている」とか主張しているのは、どうであろうか。それは、おそらく旧メガ第Ⅰ部第3巻の編集者が、エンゲルス「大綱」の概要を「経済学ノート」(=「パリ・ノート」)全体の冒頭に配して印刷したという事情にもよるのであるが、しかし、同巻編集部は「ノート」の内容説明にさいして、すでに見ておいたように、「このノート〔=『ノートⅤ』〕にエンゲルスの論文『大綱』からの抜粋が紙片（ページづけはなし）に書いて挿入されている」点を二度にわたって明記・注意していたのである。したがって、ローゼンベルクが上のように、あたかもマルクスは「経済学ノート」を作成するにあたって先ず最初にエンゲルス「大綱」からの抜粋をもってはじめたかのようにいっているのは、旧メガ編集部のこうした注意をも無視して、<sup>(注)</sup>事実を完全に誤認してしまっていたといわざるをえない。

(注) この点、「パリ・ノート」を重点的に抄訳した杉原一郎・重田晃一両氏共訳の『マルクス・経済学ノート』は、さすがに慎重であった。というのは、旧メガⅠ/3を底本とした同訳書は、エンゲルス「大綱」の概要を「経済学ノート」の先頭に掲げたとはいえ、「大綱」からの摘要が、「紙片（ページ数なし）」に書かれて「ノートⅤ」に「挿入」されていることを二度にわたって指摘している（杉原・重田訳『マルクス・経済学ノート』未来社、増補改訂版、1970年、10ページおよび13ページ参照）し、さらに「訳者解説」において「……エンゲルスの『大綱』からの抜粋は、MEGAによれば、『紙片に書いてはさんである』とあるのだから、この抜粋がノートⅤと同じ時期に作成されたかどうかについては、なお慎重な検討が必要であろう」と記していたからである。

ところで、われわれは、「1843年末から44年夏にかけてのマルクスの経済学

研究の歩み」を「ラーピンの説く順序」にもとづいて細見氏が作成した「段階」＝および「階程」区分のシェーマを、行論の必要上、ここで再び示しておこう。

「第1段階」

- (イ) エンゲルス、プルドンらの経済学的著作との最初の出会い
- (ロ) 「ノートⅠ」～「ノートⅢ」の作成（セー、スカルベク、スミスからの抜粋）
- (ハ) 「第1草稿」前段での所得の三源泉の対比的分析
  - 「第1階程」（草稿Ⅰ—Ⅶページ）
  - 「第2階程」（草稿Ⅷ—ⅩⅥページ）
  - 「第3階程」（草稿ⅩⅦ—ⅩⅩⅠページ）
- (ニ) 「第1草稿」後段〔疎外された労働〕断片（草稿ⅩⅩⅡ—ⅩⅩⅦページ）

「第2段階」

- (イ) 「ノートⅣ」, 「ノートⅤ」(リカードウ, J.ミル, マカロックらからの抜粋と評注。エンゲルス「大綱」の摘要)
- (ロ) 「第2草稿」
- (ハ) 「第3草稿」

上記の「第1段階」と「第2段階」のうち「第1段階」(イ)の項にかんして、ラーピンは次のようにいう。「エンゲルスの『国民経済学批判大綱』についてのマルクスの研究が問題になるとき、人々は、なにはさておきマルクスが作成したこの論文の要約を引き合いにだす。しかしながら、あの要約は、『独仏年誌』にエンゲルス論文が発表されたあとで、いいかえれば1844年の3月以後に、書かれたものであることに留意する必要がある。だが、マルクスはこの雑誌の編集者として、すでに1月には『大綱』をうけとっていたのであって、そのとき印刷に入れる前にさっそく、注意深く読みとおしていたことは疑いない。したがってマルクスは、エンゲルスのこの論文に二度とりくんでいるのである」(N. I. Lapin, Vergleichende Analyse., S. 198. 前掲訳「対比的分析」, 104ページ。カ点——ラーピン)。

このようにラーピンは、マルクスがエンゲルスの「大綱」に「二度とりくんでいる」という点を力説する。すなわち、一度は『独仏年誌』(1844年2月, 第

1・2合併号刊)の編集者の一人として、マルクスが当時マンチェスター在住中のエンゲルスから「大綱」の原稿をうけとった1844年の1月と、二度目はマルクスが例の摘要<sup>(注)</sup>を作成した同年3月以降と。ここでラーピンが「大綱」にかんするマルクスの「二度にわたるとりくみ」について語る場合、これはもとより、たんにマルクスが「大綱」を二度読んだということの意味するのではなく、どこまでも問題は「二度のとりくみ」ということである。とくに一度目にマルクスがエンゲルスのこの論文を読んだときの驚きと喜びは大へんなものであったに相違なく、その後、マルクスはそれを繰り返して読んだことだろうと察せられる。というのは、『独仏年誌』掲載の一論文「ヘーゲル法哲学批判・序説」ですでに「普遍人間的な解放」の担い手をプロレタリアートに見いだして、いよいよ経済学の研究に着手しようとしていた矢先のマルクスにとって、「私有財産の経済学を克服する立場」から、はやくもアダム・スミス、リカードウ、セー、ジェームズ・ミル、マカロック、マルサスといった「国民経済学者」たちの見解を根底的・抜本的に批判していたエンゲルスは、まさに信じ難い存在に思えたであろうからである。そして事実、マルクスはこの「大綱」に触発されて彼自身、いよいよ本格的な経済学研究の道を進みはじめたのであった。

(注) この摘要は、すでに前記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」のなかでも述べておいたように(前掲『立命館経済学』8—9ページ参照)、新メガIV/2では、「パリ・ノート」の冒頭ではなく、ほぼ旧メガの「ノートV」にあたる(というは、新メガでは「パリ・ノート」については「ノートI」とか「ノートII」とかいう呼称が使われていないから)、すなわちG.ブレヴォ抜粋とデステュト・ドゥ・トラン抜粋との間に『独仏年誌』におけるエンゲルスと題して配置されている(Vgl. MEGÄ, IV/2, SS. 485—487)。

ところでラーピンは、「大綱」にたいするマルクスの「二度にわたるとりくみ」にかんして、つぎのように説く。——「こうした二度にわたるとりくみは、つぎの事情と関連していた。すなわち、経済学の諸問題の研究にやっと手をつけたばかりのマルクスには、エンゲルスの『大綱』の特殊経済学的内容のすべてをすぐさま理解することは、とうてい無理だったのである。一方エンゲルスは、この論文ですでに、経済学的諸範疇のいっさいを意のままに使いこなす

専門家ぶりを発揮していた。エンゲルス論文との最初の出会いのさいにはマルクスは、当時かれ自身をもっとも関心をよせていた問題に、すなわち、労働と資本との関係の問題、資本主義社会の基本法則としての普遍的競争の問題に、とくに着目したのであった。……いずれにせよ、まさしくこの種の問題領域では、エンゲルスの『大綱』が所得の三源泉の断片におよぼした影響がはっきりと読みとれる」（N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse*, S. 198. 前掲訳「対比的分析」, 104ページ。力点——ラーピン）。

ここでラーピンが、「経済学の諸問題の研究にやっとな手をつけたばかりのマルクスには、エンゲルスの『大綱』の特殊経済学的内容のすべてをすぐさま理解することは、とうてい無理だった」点、これにたいして「エンゲルスは、この論文ですでに、経済学的諸範疇のいっさいを意のままに使いこなす専門家ぶりを発揮していた」点を指摘しているのは、なるほどそのとおりだろうと思われる。また当時（「第1段階」のはじめ）のマルクス自身の主要な関心が「労働と資本との関係の問題」や「普遍的競争の問題」に向けられており、「まさしくこの種の問題領域では、エンゲルスの『大綱』が所得の三源泉の断片におよぼした影響がはっきりと読みとれる」のも、たしかな事実であろう。これは、とりもなおさず、当時のマルクスがエンゲルス「大綱」から「競争の矛盾は私有財産そのものの矛盾とまったく同一である」（Karl Marx/Friedrich Engels, *Werke* (=MEW), Band 1, Berlin, 1972, S. 513. 『マルクス＝エンゲルス全集』大目書店, 第1巻, 557ページ）とする競争論の見地——といっても、これは「競争の矛盾」<sup>(注)</sup>の見地であったが——をうけいれ攝取しつつあったということ意味していた。

（注） 念のために、この「競争の矛盾」を説明したエンゲルス自身の一文をここに引いておこう。——「すべてを所有することが各個人の利益であるが、各人が平等に所有することが社会の利益である。こうして、一般的利害と個人的利害とは、真正面から対立する。競争の矛盾は各人は独占を望まざるをえないのに、社会そのものは独占によって損害をうけ、したがってそれを遠ざけねばならない、という点にある」（MEW, Bd. 1, SS. 513—514. 『全集』第1巻, 557—558ページ。力点——引用者）。

したがって、エンゲルスの「競争の矛盾」の見地とは、諸階級間の利害の対立、つまり階級関係の対立性を重視する立場だともいえよう。

なお、こうした点については、詳しくは拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について——『国民経済学批判大綱』（1844年）を中心として——」（岡崎栄松・大島雄一編『資本論の研究』日本評論社、1974年所収、19—21ページ）を参照されたい。

さて、ラーピンは「マルクスの経済学研究の歩み」にかんする前記シェーマのうち、「第1段階」(ロ)「ノートⅠ」～「ノートⅢ」の作成の部分を敷衍しながら、つぎのようにいっている。

「エンゲルスと同じくマルクスも、最初の時期には古典経済学者と俗流経済学者の区別をつけていなかった。セーがフランスにおけるスミス思想の最高の解説者として、またフランス経済学者の初期の学派の第一人者としてはばきかせていたので、セーの著作に通暁することが良き教養にとってほとんど不可欠の要件と考えられていた。無理からぬことにマルクスも、パリへ追われたのち、職業的経済学者の著作の研究をまさにセーの『経済学概論』から始めたのである。第1ノートには、もう一人のスミス追随者——スカルベク——の著作の短い要約が収められている。／いくらもたたないうちにマルクスは、スミス学派の俗流家たちの著作からその真の源泉へつきすすんでいった。第2ノートと第3ノートは、アダム・スミスの著書『諸国民の富の性質と原因にかんする研究』からの抜粋を含んでいる。マルクスはただちにこの科学的労作の礎石的意義に感づいて、この労作を入念かつ全面的に検討しようと決心したのであった。スミスからの抜粋は非常に長いもの（4印刷ボーゲン）で、1844年の抜粋のなかでこれに匹敵するものはない」（N. I. Lapin, Vergleichende Analyse., S. 199. 前掲訳「対比的分析」, 105ページ）。

ここでラーピンは、マルクスがJ. B. セーからアダム・スミスへと研究をすすめてゆくプロセス（「ノートⅠ」→「ノートⅢ」）について興味深く描きだしているが、すでに見たように、この時期（「第1段階」）にはマルクスは、エンゲルス「大綱」からの摘要をまだ作成していなかったのであった。そしてラーピンは、スミス研究の過程でマルクスが次第に「第1草稿」執筆の方向へむかう

経緯を次のように説いている。

「スミスの著書の研究をすすめていくうちにマルクスの目は、三つの基本階級——労働者、資本家、地主——の『所得の源泉』としての労賃、資本の利潤、ならびに地代に関する問題領域に集中していった。問題のこのような分類は、一つにはスミスの著書の構造に助けられてのことであった。<sup>(注)</sup>同時にまた、階級闘争の実在的基盤の了解を経済学研究の目的にすえていたマルクス自身の思想的目標設定によるものでもあった」(Ebenda, S. 199. 前掲訳, 105ページ。力点——引用者)。

(注) この部分にはラーピン自身が次のように註記している。「マルクスがとくに入念にノートしている、スミスの著書の〔第1篇〕第8章から第11章までの表題をあげておこう。——『労賃について』、『資本の利潤について』、『労働と資本のさまざまな用途における、労賃と利潤について』、『地代』」(Ebenda, S. 199. 前掲訳, 117ページ)。

ラーピンがわざわざこのように自注したのは、おそらく、「マルクスの経済学研究の歩み」における「第1段階」前段部分の三欄分割(原則として)の見出し——「労賃」、「資本の利潤」および「地代」——が、もともとスミス『国富論』第1編第8章～第11章の表題に由来していることを示すためだったと考えられるが、この点にかかわって山中隆次氏が興味深い立言をしておられるので、それをここで聞いておこう。

山中氏は、「ノートⅡ」について「ここではスミス『国富論』第1、第2篇からの二回にわたる抜粋が、p. 1—13には第1回の、p. 13—23には第2回の抜粋が書きこまれ」云々と指摘したのち、「第1回は『国富論』第1編第1章～第7章と第2編第2章からの抜粋、第2回はそれ以外の残部、つまり第1編第8章～第11章と第2編第1、3～5章からの抜粋というように、二度の抜粋の間には、一見何の変哲もない、ごく自然な関係しかないようにみえるが、しかし、抜粋の内容を検討してみると、スミスの『労賃』論以下の三大所得分析にはじまる第2回の抜粋は第2編全体に及ぶ抜粋にもかかわらず、ラーピンの指摘するように、内容的に『労賃、資本の利潤、ならびに地代に関する問題領域に集中している』特徴をもっている。このことは、このスミスからの第2回の抜粋が第1『草稿』前段のいわゆる三大所得分析の構想と、あるいはその執筆開始時期と深い関連をもつと想定できるのではなからうか」(上記・山中論文、前掲誌, 112ページ。力点——引用者)。

このように「第1草稿」前段部分の三欄分割の「構想」は『国富論』第1編第8章～第11章に由来すると考える山中氏の見解については、なお同氏の別稿「初期マ

ルクスの経済学研究（Ⅱ）——パリ時代の『スミス抜粋』を中心に（その1）——」（中央大学『商学論纂』第27巻第3・4号、135ページおよび172ページ）をも参照のこと。

「第1草稿」前段における三欄分割「構想」の生成過程についての、山中氏のこうした考察は、たしかに貴重なものと私には思われるが、ただ、ラーピンも「問題のこのような分類」（三欄分割）は、「一つにはスミスの著書の構造に助けられてのことであった」としながら、他方では「同時にまた、階級闘争の実在的基盤の了解を経済学研究の目的にすえていたマルクス自身の思想的目標設定によるものでもあった」（前出）としている点に十分留意する必要があるように考えられる。

こうしてマルクスは、次第に「第1草稿」前段の三欄分割の「構想」に近づいてゆくのだが、しかし、さきにも述べたように、この「第1段階」の時期にはマルクスは「大綱」からの摘要をまだ作成していなかったのである。そしてこの摘要の作成にあたっては、ラーピンも、「特徴的なことは、マルクスの要約がエンゲルス論文の全体にはわたらず、その半分をやや上まわる範囲に限られていることである」（Ebenda, S. 198. 上掲訳、104ページ）といっているように、「大綱」のまゝ1/3ほどは摘要の対象外に置かれていたのであった。ところが、さきに引用したようにローゼンベルクは、「経済学者からの抜粋のまゝに、マルクスはエンゲルスの『大綱』の簡単な概要を置いている」（前出、力点——引用者）と主張するのだが、この場合には、あたかも摘要の作成時期が「ノートⅠ」以前であったかのように思われる。またローゼンベルクが、「マルクスは評注の大部分でエンゲルスのあとを追っており、ときには逐語的にすらそうしている」（前出、力点——引用者）というときには、この引用文のすぐあとで彼が引いている「ノートⅠ」中のセー評注<sup>(注)</sup>、すなわち「国民経済学」は私的所有を自明の前提と見なす「致富学」だというマルクスのセー評注<sup>(注)</sup>を念頭に思い浮かべているようである（См. Д. И. Розенберг, Очерки развития экономического учения., стр. 65—66. 前掲訳書『初期マルクス経済学説の形成』上巻、95—96ページ参照）。

（注）ここで「ノートⅠ」中のセー評注の当該箇所を引用しておこう。——「私的所有は一つの事実であって、この事実の基礎づけは国民経済学の関知するところではないが、その事実が国民経済学の基礎をなしている。／私有財産なくして富は存

在しないし、国民経済学はその本質上、致富学である。したがって私有財産なくして経済学〔politische Ökonomie〕は存在しない。だから国民経済学のすべては、必然性のない一個の事実にもとづいているのである」（MEGA, I/3, S. 449. 杉原四郎・重田晃一訳『経済学ノート』35—36ページ。力点——マルクス）。

このセー評注を含む「ノートⅠ」は、しかし、くりかえしいうように、「大綱」からの摘要の対象外であり、マルクスのこの評注は「大綱」のはじめの部分に彼が自分流に要約したものと見なすべきであろう。

### 〔5〕 エンゲルス「大綱」の摘要（その2）

さて、エヌ・イ・ラーピンによれば、「〔『ノートⅡ』および『ノートⅢ』で〕スミスの著書を研究し終えた若きマルクスは、いまやこうした分析〔『所得の三源泉の分析』〕をおこなうに十分な力量をつけたと考えた」（N. I. Lapin, Vergleichende Analyse, S. 199. 前掲訳「対比的分析」, 105ページ）ので、いよいよ彼は1844年4月頃から『経哲草稿』「第1草稿」の執筆にとりかかる。そして、「疎外された労働」断片を含む「第1草稿」全体を書きあげた同年夏、彼は「大綱」にたいする二度目の「とりくみ」をおこない、「その半分をやや上まわる範囲」について摘要を作成する。この摘要は、その書き出し部分が次のように、すなわち「私的<sup>1</sup>所有。その最初の結果である商業、それは、すべての活動と同じように、商業をいとなむものにとって直接<sup>2</sup>の利得の源泉となる。商業によって規定される第1の範疇である価値。抽象的な真実<sup>3</sup>価値と交換<sup>4</sup>価値。セーは真実<sup>5</sup>価値を規定するものとして効用を、リカードウとミルは生産<sup>6</sup>費をあげる」（MEGA, I/3, S. 437. 前掲訳書, 29ページ。力点——マルクス）云々となっていて、これは明らかに価値論を中心テーマに据えた摘要といってよい。この点を指摘しながら、ラーピンは次のようにいう。「『大綱』研究のこの第2段階では、……彼〔マルクス〕は、価値は何によって決まるか——有用性によってか（スミス、セー）、生産費によってか（リカードウ、ミル）、という問題をめぐるスミス学派とリカードウ学派との論争を論じた個所で、エンゲルスのとっている立場

にまっすぐ焦点をしぼっている。マルクスはマカロック、プレヴォ、リカードウ、ミルらの著作を要約しているとき（第4、第5ノート）、いいかえれば経済学研究の第2段階に着手したとき、はじめてこの問題領域に目をひらかれたのであった。『大綱』の要約そのものが最初の三冊のノートではなく、あとのノートのなかに見いだされることも、以上のことから説明がつく。／したがって、マルクスが二度にわたってエンゲルス論文の研究にとりくんだという事実は、1844年におけるマルクスの経済学研究に二つの主要段階が存在することからみあっており、これら二つの段階のそれぞれにおける彼の問題関心の違いと、厳密に経済学的な問題へのつつこみの深まりを反映している」（N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse.*, SS. 198—199. 前掲訳, 104—105ページ）。

ここでラーピンが、価値を「有用性」＝効用で規定するものとしてセーとともにスミスを挙げているのは不適切であろう。なぜなら、周知のようにスミスは価値論の分野で投下労働説と支配労働説という二重の所説を並存・交錯させていたからである。この場合、支配労働説は結局、需要供給説に帰着し、こうして「有用性」による価値規定に通ずるものだといってよからうが、投下労働説についていえば、これは「有用性」あるいは効用による価値規定とは本質的に異なっているからである。他方、生産費による価値規定は、ここではおそらく投下労働説と同義のものと解されているのであろう。したがって、価値規定をめぐる論争を問題にするのであれば、「スミス学派とリカードウ学派との論争」について語るべきではなく、セーとリカードウ学派との論争をとりあげるべきであろう。ここではラーピンは、スミスとセーとを単純に同一視しすぎているといわざるをえない。

ちなみに、「エンゲルスのとっている立場」について一言しておけば、当時のエンゲルスは、リカードウの価値規定はあまりに抽象的・非現実的だとして、リカードウ投下労働説を否定する立場をとっており、そのことがこの時期（＝「第2段階」）のマルクスに強く影響していたのは、たしかな事実である。<sup>（注）</sup>

（注） こうした点については、さしあたり拙稿「初期マルクスの経済理論について——『経済学＝哲学手稿』を中心として——」（『立命館経済学』第16巻第3・4号、

1967年10月、94—96ページ）、また前記拙稿「初期エンゲルスの価値論および分配論について」（前掲書『資本論の研究』22—31ページ）を参照されたい。

なお、ここでラーピンが「マルクスはマカロック、プレヴォ、リカードウ、ミルらの著作を要約しているとき（第4、第5ノート）、いいかえれば経済学研究の第2段階に着手したときに、はじめてこの問題領域〔価値論の領域〕に目をひらかれた」（前出、力点——引用者）と力説したのは当を得た指摘であったといえよう。さらにまたラーピンが、エンゲルス「大綱」にかんするマルクスの「二度にわたるとりくみ」を前面に押しだして、「マルクスが二度にわたってエンゲルス論文の研究にとりくんだという事実は、1844年におけるマルクスの経済学研究に二つの主要段階が存在することとからみ合っており、これら二つの段階のそれぞれにおける彼の問題関心の違いと、厳密に経済学的な問題へのつらこみの深まりを反映している」（前出、力点——引用者）と説いたのも、けだし、卓見であったといつてよからう。

ところで、さきに見ておいたように、旧メガI/3ではエンゲルス「大綱」の摘要は「ノートV」のなかに「紙片（ページづけはなし）に書いて挿入されている」（前出）と記されて、「パリ・ノート」の冒頭に配されていたのだが、ラーピンは、上掲引用文において「大綱」の「要約そのもの」は「最初の三冊のノート〔『ノートI』～『ノートIII』〕ではなく、あとのノート〔『ノートIV』と『ノートV』〕のなかに見いだされる」（前出、力点——引用者）と述べていた。つまりラーピンも、エンゲルス「大綱」の摘要の存在個所については、「あとのノート」というにとどまっていた、「ノートIV」か、それとも「ノートV」か、そのどちらとも特定できていなかったわけである。この点では細見英氏は、前記の紹介論文『経哲草稿』第1草稿の執筆順序において、「このノート〔『ノートV』〕に、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』からの抜粋を記した紙片はさまれている」（前掲『立命館経済学』誌、64ページ。力点——引用者）と書いていた。また同氏は、「ラーピン論文」の翻訳にさいしても、上に引用したラーピンの一文、すなわち「『大綱』の要約そのものが最初の三冊のノートでなく、あとのノートのなかに見いだされる」云々という一文に、わざわざ訳者

補注をつけて、「『大綱』の要約は、紙片に記して第5ノートにはさんである」（前掲訳「対比的分析」、117ページの注(5)参照）と書いておられた。

しかし、山中隆次氏の丹念な調査研究の結果は次のようなものであった。——「このマカロック『講義』からの抜粋が終っているオリジナル p. 9（『ノート V』のマルクス自身によるページづけ）の裏に、問題の〈エンゲルス論文抜粋〉が、そのページ全体にわたって書きこまれている。表題が『独仏年誌のエンゲルス』となっていることはともかくとして、ここでの最大の問題点は、〈エンゲルス論文抜粋〉が *MEGA* 編集者により説明されているような、「紙片に（Auf losem Blatt）」に書かれて第5『ノート』に『挿入された（eingefügt）』ものではなく、はじめから、この第5『ノート』のマカロックの『講義』からの抜粋 p. 9 の裏に直接書きこまれていることである。しかも、はっきりと糸による仮綴じの跡もある。このことは *MEGA* 編集者の誤った説明<sup>(注)</sup>と『抜粋ノート』冒頭への配列から、〈エンゲルス論文抜粋〉が第5『ノート』よりも以前の、この時代のマルクス経済学研究のかなり初期に書かれたものと一般ににあたえていた印象ないし誤解を一掃するほどに、重大な事実であると思える。……ともかく、こうして、一方では〈エンゲルス論文抜粋〉が何の疑いもなく第5『ノート』と同じ時期に書かれたものであることが明確化された。……こうして、はじめに紹介したラーピンの、マルクスのエンゲルス論文にたいする『二度にわたるとりくみ』説も、きわめて根拠のある推定として浮かびあがってくるのである」（上記・山中論文「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係」、前掲『思想』誌、113—114ページ。イタリックおよび力点——山中、ゴシック——引用者）。

（注）この個所に山中氏は、つぎのように自注しておられる。「この *MEGA* 編集者の説明の誤りは、〈エンゲルス論文抜粋〉にマルクスによるページ付けがなかったことに加えて、そのフォトコピーによる推定に由来するものと思われる。ラーピンも〈エンゲルス論文抜粋〉が『最初の三冊のノートでなく、あとのノート（第4、第5『ノート』）のなかに見いだされる』ところまでは突きとめているが、はっきりと第5『ノート』のなかにも、しかも、マカロック『講義』からの抜粋の終了ページの裏に書かれたものとは断定できなかった。これは直接オリジナルを手にしては

じめて判ることであり、フォトコピーによる調査の限界を感じさせられた」（同上、116ページ）。

こうした「フォトコピーによる調査の限界」にかんする山中氏の指摘は、もとより、はなはだ適切なものというべきであろう。

こうしてエンゲルス「大綱」の摘要は、旧メガ I/3 編集部が説明していたように「ノート V」に「紙片（ページづけはなし）」に書いて「挿入」されていたわけではなく、「『ノート V』中の」マカロック『講義』からの抜粋 p.9 の裏に直接書きこまれている」というのが事実であって、これは、山中氏自身もいうように、「一般にあたえていた印象ないし誤解を一掃するほどに、重大な事実である」といって過言ではなからう。そして、この事実をつきとめることによって、「大綱」の摘要はマルクスの経済学研究の「第 1 段階」にではなく、「何の疑いもなく第 5 『ノート』と同じ時期 [=『第 2 段階』のはじめ] に書かれたものであることが明確化された」のであった。こうして山中氏は、「ラーピンの、マルクスのエンゲルス論文にたいする『二度にわたるとりくみ』説」を「きわめて根拠のある推定」だと確認・補強されたのであって、この点でも氏は初期マルクスの研究に大きく寄与された、といつてよからう。

## 〔6〕「パリ・ノート」と『経哲草稿』との関連

さて、われわれは、「パリ・ノート」と『経哲草稿』との関連の問題をめぐるラーピンの所論を見ておくことにしよう。その場合、前記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について」で明らかとなった諸点を整理・要約することからはじめよう。

デ・イ・ローゼンベルクは、その著書『初期マルクス経済学説の形成』のなかで、「パリ・ノート」と『経哲草稿』とを、それぞれに独立した、ひとまとまりのものとして扱い、とくに「ノート I」～「ノート V」については（ただし「ノート IV」中のクセノフォン抜粋を除く）その執筆順序は全体として「パリ・

ノート」から『経哲草稿』への順だと解していた（前記拙稿，21—22ページ参照）。これは、旧メガ I/3 の編集責任者アドラツキーの「序説」における次の記述、すなわち「これら〔「パリ・ノート」とくに「ノート I」～「ノート V」〕は上述の緒論稿〔つまり『経哲草稿』〕と直接関連して興味深く、その直前の段階のものとして、それらは」（前出、力点——引用者）云々という記述に依拠して書かれたのだらうと推察されるが、それはともかく、ローゼンベルクは、エンゲルス以外の経済学者たちからの抜粋の順序は、セー→スミス→リカードウ→J. ミルであると考えており、しかもセー＝スミス抜粋とリカードウ抜粋とのあいだには、また後者とミル抜粋とのあいだには、形式の点でも内容の点でも明白な相違があり、とりわけ「ミル評注」は「パリ・ノート」中もっとも理論水準の高い「特別」のものだと評価していた（См. Д. И. Розенберг, *Очерки развития экономического учения.*, стр. 63—64. 前掲訳書『初期マルクス経済学説の形成』上巻，93ページ参照。なお前記拙稿，18—20ページ参照）。しかしローゼンベルクは、これらの抜粋ノートと『経哲草稿』（これはヘーゲル『精神現象学』最終章からの抜粋を別とすれば、三つの草稿から成る）との執筆順序の問題を立ち入って考察しようとはせず、旧メガ編集長アドラツキーの説明どおり、「ノート I」～「ノート V」全体を『経哲草稿』全体の準備ノートと見なし、だからまた執筆順序も『草稿』が全体として「パリ・ノート」よりもあとというふうに考えていた。つまり、彼によれば、マルクスは「ノート I」から「ノート V」までを書き終えてから『経哲草稿』の執筆にとりかかった、ということになる。

ところで、わが国では「ラーピン論文」公表まで、「パリ・ノート」と『経哲草稿』の執筆順序の問題をめぐる種々の所説がおこなわれていたが、それらは大別すれば、「ノート」＝「ミル評注」先行論者たち（細見英，平井俊彦，宮崎喜代司の諸氏）の見解と『経哲草稿』先行論者たち（大島清，中川弘の諸氏）の見解とに分けることができる。これらの諸氏の見解は、前記拙稿「いわゆるパリ・ノートと『経済学・哲学草稿』について——「ラーピン論文」公表以前を中心として——」のなかで、かなり詳しく見ておいたので、ここでは「ミル評注」先行論者たちの代表として細見氏を、また『草稿』先行論者たちの代表として

は中川弘氏をとりあげて、両氏の所論を摘記するにとどめよう。

**細見英氏の場合**（「J. ミル『政治経済学』への批判的評注——マルクスの最初の経済学研究より——」『立命館経済学』第10巻第4号、1961年10月所収。「マルクスとヘーゲル——経済学批判と弁証法——」経済学史学会編『「資本論」の成立』岩波書店、1967年所収、ほか）

(1) 細見氏は、旧メガ編集長アドラツキーにしたがって、「パリ・ノート」のうち、「ミル評注」を含む「最初の五冊（「ノートⅠ」～「ノートⅤ」）は『経哲草稿』以前に作成されたものと考えていた。(2) 氏の見解によれば、「ミル評注」で「経済学的諸範疇批判の最初の試論的展開」をおこなったマルクスは、「当然ながら階級関係の必然性の解明にまで」すすまなければならなかったが、「商品交換＝商品生産の論理から、その論理的演繹において階級分裂・階級関係を展開すること」は「なんとしても不可能」であった。(3) そこでマルクスは、「ふたたび出発点にたちかえって市民社会批判＝経済学批判の論理を練りなおす」のであって、こうして生成したのが『経済学・哲学草稿』にほかならなかった。(4) だから、「ミル評注」と『経哲草稿』とのあいだには、「分析視角と論理展開の方法」の点で「まったく」の「転換」がある、つまり交換関係視角から生産関係視角への「まったく」の「転換」がある。(5) こうして細見氏は、分析視角の深化という点からいっても、執筆順序は「ミル評注」から『経哲草稿』へのはずだ、と推定したのであった（前記拙稿、29—32ページ参照）。

**中川弘氏の場合**（「『経済学・哲学草稿』と『ミル評注』——『疎外された労働』を中心とした一考察——」福島大学『商学論集』第37巻第2号、1968年10月所収）

(1) 中川氏はまず、『独伝年誌』に掲載されたマルクスの二論文、すなわち「ユダヤ人問題によせて」と「ヘーゲル法哲学批判・序説」の分析基準を問題にしつつ、前者での「近代市民社会分析の基準」は「商品＝貨幣関係基準」であり、後者でのそれは「資本関係基準」だと論定される。(2) そのうえで氏は、「商品＝貨幣関係基準」は「ミル評注」へ、また他方、「資本関係基準」は『経哲草稿』へと「さしあたり切り離されたまま継承され」と考える。(3) ただし、氏の場合、上記二つの「分析基準」はたんなる平列的補完関係にあるので

はなく、「資本関係基準」が主要な役割をはたし、「商品＝貨幣関係基準」は補助役をつとめるにすぎないとされる。(4) こうして中川氏は、執筆順序については『経哲草稿』のほうが「ミル評注」より先行すると主張された。(5) そして、このような立場から中川氏は、「ミル評注」先行論者たち、とくに細見氏にたいして一連の論拠を示したのち、つぎのように批判したのであった。「執筆順序は細見氏とは逆に、第1草稿——ミル評注——第2、第3草稿という推定も可能であるかと思われる。もしかかる推定が正しいとすれば、細見氏の立論の前提の一つは崩れることになるまいか」（前掲誌、18ページ。力点——中川。なお、このあたりのことについては前記拙稿、43—50ページをも参照されたい）。

ところで、ラーピンは「1844年のマルクスの経済学研究の成果は、つぎのあたりで残されている」として、こう述べている。「経済学者たちの著作からの抜粋とそれへの評注をふくむノート [=「パリ・ノート」]（1844年中頃までにすでに五冊のノートが書かれていた。そのうち抜粋はほぼ13印刷ボーゲン分、評注は2印刷ボーゲン分の長さ）。ならびに、経済学の諸問題について自分自身の議論を展開した本来の草稿 [=「経哲草稿」]（三つの草稿。そのうち第2草稿は、最後の4ページだけ現存する。保存されている草稿全体の長さは、約11印刷ボーゲン分）。したがって、抜粋が研究の第1段階、草稿が第2段階を反映していると考えるのが、まったく自然なように思われよう。事実多くの文献では、マルクスの研究の歩みがまさにこの順序で示されている」（N. I. Lapin, *Vergleichende Analyse*, S. 197. 前掲訳「対比的分析」, 103ページ）。

このように、「1844年のマルクスの経済学研究の成果」（「パリ・ノート」と『経哲草稿』）は、一見したところでは「ノート」が「第1段階」で『草稿』が「第2段階」、つまり執筆順序は「ノート」→『草稿』と考えるのが「まったく自然なように思われよう」とラーピンはいう。「だが、実際には事態はもっと複雑である」として、彼はいくつかの事例を引合いに出す。——

「たとえば次のことをどう説明するか。第4、第5の抜粋ノート（リカードウ、ミル、マカロック、プレヴォ、デステュット・ドゥ・トランの著作からの）でとりあげている諸著作への言及が、第1草稿ではまったく見あたらず、この種の唯一

の言及——リカードウの著作『経済学と課税の原理』からの引用——も、第4ノートでの引用は直接リカードウの著書からおこなわれているのに、第1草稿では原本からでなく、デュレの書物から孫引きされていること。また次のことをどう説明するか。ミルの著書からの抜粋にマルクスが挿入している疎外の精髓としての貨幣にかんする研究が、第1草稿では『疎外された労働』断片においてさえまったく反映されていないのにたいして、第2、第3草稿ではこの研究の痕跡が明瞭にみてとれること」（Vgl. ebenda, S. 197. 前掲訳, 103ページ参照）。

さらにラーピンは、このような事例のほかにも、「これに似た多くの問題」があるとして、「たとえば第4、第5ノートでの抜粋が第2、第3草稿で広範に利用されていること、一般に第2、第3草稿でマルクスの示している経済学的知識の水準が、第1草稿におけるよりも著しく高いことなど」を挙げる。そしてこれらの諸点からラーピンは、「1843年末から1844年8月までのマルクスの経済学研究」を「二つの主要段階」に区分することは「容易」だと考えたのであった。すなわち、「経済学の著作との最初の出会ってから、第1草稿を書きあげるまで」の「第1段階」と、「リカードウ、ミルらの著書の抜粋（第4、第5ノート）から、第3草稿の仕上げまで」の「第2段階」と（Vgl. ebenda, S. 197. 前掲訳, 103—104ページ参照）。

ここでわれわれは、さきにとりあげた、エンゲルス「大綱」にたいするマルクスの「二度にわたるとりくみ」を指摘しながら、ラーピンが次のように述べていたことを想起すべきである。「……マルクスが二度にわたってエンゲルス論文の研究にとりくんだという事実は、1844年におけるマルクスの経済学研究に二つの主要段階が存在することとからみ合っており、これら二つの段階のそれぞれにおける彼の問題関心の違いと、厳密に経済学的な問題へのつらこみの深まりを反映している」（前出、力点一引用者）。

このようにラーピンは、「1843年末から1844年8月までのマルクスの経済学研究」を、「第1段階」と「第2段階」という「二つの主要段階」に区別すべきだと主張して、この「二つの主要段階」ではマルクスの「問題関心の違い」と「厳密に経済学的な問題へのつらこみの深まり」がはっきり見られると力説

するのである。すなわち、彼によれば、マルクスは「第1段階」での「疎外」論を執筆したのち、リカードウ、J.ミル、マカロックらの著作から抜粋し、これらに評注を加えてゆくプロセスで、マルクスの問題関心は価値の概念規定や貨幣の本質把握などの問題にひきよせられた。そして、ラーピンの見るところでは、こうした問題視角からマルクスは二度目の「大綱」研究にとりくんだのであった。

「1843年末から1844年8月までのマルクスの経済学研究」の進展過程をおよそ上のように解するラーピンの所説は、これを執筆順序の問題にひきよせていえば、「ノートⅠ」～「ノートⅢ」→「第1草稿」→「ノートⅣ」,「ノートⅤ」→「第2草稿」,「第3草稿」, というふうになるであろう。すなわち、ラーピン説は、「ミル評注」と「第1草稿」との執筆上の先後関係にかんしては、「ミル評注」は「第1草稿」のあとに書かれたということになり、『経哲草稿』先行説を文献考証的に裏づけるものだったわけである。もちろん、ラーピン自身は「ミル評注」と『経哲草稿』の先後関係の問題をめぐる、わが国での「論争」——というよりも見解の相違というべきか——を意識してその論文を書いたのではないが、しかし、「ラーピン論文」の出現は、はからずもこの「論争」に決着をつけるという、いわば副作用をおよぼしたのである。以下、この間の事情を、細見氏と中川氏とのやりとりを跡づけるなかで示しておこう。そして、そのあとで、1971年末までに発表された一連の著書・論文をとりあげることによって、「ラーピン論文」の公表がわが国の初期マルクス研究家たちの間にひきおこした波紋を手短かに見ておくことにしよう。

### 〔7〕 「ラーピン論文」公表直後の波紋

細見英氏は前記のラーピン紹介論文のなかで、つぎのように述べておられる。「……五冊の経済学ノート〔「ノートⅠ」～「ノートⅤ」〕と三つの草稿の執筆順序としては、ラーピンの説くところ（ノートⅠ・Ⅱ・Ⅲ→第1草稿→ノートⅣ・Ⅴ→

第2・第3草稿）が、ほぼの射ているように思われるのである。この点について私は、反省をこめて自説の訂正をおこなわなければならない」（前掲『立命館経済学』、66ページ）。

同じ紹介論文で氏はまた、こうも書いておられる。「マルクスの近代社会批判の展開の大きな流れとしては、私の構想するところに間違いはないとしても、この大きな流れに『ミル評注』と『経哲草稿』とを機械的にあてはめたことは、なんとしても臆断であったといわなければならない。私はいま、マルクスのノートや草稿内容の綿密な考証をなござりにして臆断をくだしたことを反省し、『ミル評注』と『経哲草稿』の執筆順序の問題については、これまでの解釈を撤回してラービン説に拠ろうと思う」（同上、68ページ）。

見られるように、1970年8月に本誌『立命館経済学』において「ラービン論文」を紹介するプロセスで率直に自己批判した細見氏は、翌71年3月に、「ラービンの研究成果はより広い諸者に全訳のかたちで提供するに値いするものと考えて」（前出）、その全訳を『思想』誌上に掲載したさいにも「訳者まえがき」のなかで、「ラービン論文」の意義と限度に言及しつつ、従来の自説、すなわち「ミル評注」先行説を全面的に撤回されたのであった。――

「『ミル評注』と『経哲草稿』の執筆順序は一見些細な問題のようでありながら、マルクスにおける商品＝貨幣把握と資本把握の連関、市民社会批判と資本主義批判の連関を追究するうえで重要な意義をもつことは、あらためて指摘するまでもないであろう。ラービンは、もっぱら五冊のノートと三つの草稿の比較という考証的手法によって、それらの執筆順序を推定している。『草稿』と『ノート』との方法的・論理的な連関の問題はいぜんとして残されているといわなければならない。しかし執筆順序の問題としては、ラービンの考証は簡潔ながらも手堅いものであって、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』とのマルクスの『二度にわたるとりくみ』の指摘ともあいまって、説得力はすこぶる強いものになっている。私はここに、『ミル評注』と『経哲草稿』の執筆順序についてはこれまでの解釈を撤回して、ラービン説に拠ることを表明したい」（前掲掲「対比的分析」、『訳者まえがき』101ページ。力点――引用者）。

このように細見氏は、「ラーピン論文」の出現にもかかわらず『草稿』と『ノート』との方法的・論理的な連関の問題」は依然として未解決のままだとはいえ、執筆順序の点では「ラーピンの考証は簡潔ながらも手堅いもの」であって、「大綱」にたいするマルクスの「二度にわたるとりくみ」の指摘とともに「説得力はすこぶる強い」として、「私はここに、『ミル評注』と『経哲草稿』の執筆順序についてはこれまでの解釈〔『ミル評注』先行説〕を撤回して、ラーピン説に拠ることを表明したい」と宣言されたのである。そして氏は、「その上で、『リカードウ評注』『ミル評注』をふくむ『経済学ノート』と『経哲草稿』との内容的・論理的な連関にさらに検討をくわえ、『経済学批判要綱』『資本論』への展開を見すえつつ、マルクスの政治経済学批判体系を生成と構造の総体において解明することを、今後の課題としたいと考える」（同上、101ページ）と声明されたのであった。その後、細見氏が、みずからに課したこうした研究プラン——「今後の課題」——が実現されて実を結ぶことが大いに期待されたのであるが、1975年12月、氏はその短かすぎる生涯を閉じたのであった。返す返すも残念なことであった。

さて、他方、「ラーピン論文」の出現によって自説（『経哲草稿』先行説）を考証的に裏づけられた形の中川弘氏は、1971年12月、その論稿「唯物論的歴史観の形成と《パリ時代》のマルクス」の行論の過程で次のように述べられた。「……三つの草稿より成る『経済学・哲学草稿』と、1844年夏頃までにⅠ～Ⅴの五冊が作成された『経済学ノート』は、『マルクス「経済学・哲学草稿」における所得の三源泉の対比的分析』（細見英氏により『思想』1971年3月号に訳載）と題するニコライ・I・ラーピン論文によって、その執筆順序が『ノート』Ⅰ～Ⅲ→第1草稿→『ノート』Ⅳ～Ⅴ→第2、第3草稿であることが考証された。『ミル評注』は『ノート』Ⅳに含まれている。したがって第1草稿と『ミル評注』の執筆順序は第1草稿→『ミル評注』である……」（福島大学『商学論集』第40巻第2号所収、22ページ）。

見られるとおり中川氏は、「執筆順序が『ノート』Ⅰ～Ⅲ→第1草稿→『ノート』Ⅳ～Ⅴ→第2、第3草稿であること」が「ラーピン論文」によって

「考証」されたといい、また「『ミル評注』は『ノート』Ⅳに含まれている」のだから、「したがって第1草稿と『ミル評注』の執筆順序は第1草稿→『ミル評注』である」と、いわば淡々と述べられたのであった。

このように中川氏は、持論の『経哲草稿』先行説が「ラーピン論文」の公表によって文献考証的に裏うちされたことを、さりげなく語ったのであるが、これについては、すでに細見氏が、さきのラーピン紹介論文（1970年8月発表）において、中川論文の先見性を率直に認めていたという事情があったように思われる。すなわち、細見氏は例の紹介論文のなかで、「第1草稿→『ミル評注』→第2、第3草稿、という執筆順序は、ラーピン論文に先だって、すでにわが国で中川氏によって提起されていた」として、つぎのように『草稿』先行説の妥当性を承認しておられた。「……[中川弘氏は]『ミル評注』→『経哲草稿』という私の推定に対置して、『執筆順序は細見氏とは逆に、第1草稿——『ミル評注』——第2、第3草稿という推定も可能であるかと思われる』と記されている。中川氏は慎重にも、『いずれもおおよそ推定の域を出ないものである以上、ここでは文献史的問題のこれ以上の詮索はひとまず留保する』とっておられるが、私は氏の推定の方が正しいと考える」（細見「『経哲草稿』第1草稿の執筆順序」前掲誌、70ページ。力点——中川、ゴシック——引用者）。

「論争」相手の所説の正当性を率直に認めた細見氏のこうした態度は、まことにすがすがしく、立派であったというべきであろう。<sup>(注)</sup>

(注) なお、時期的には数年後（1976年9月）のことになるが、山之内靖氏はその論稿「『経済学・哲学草稿』の内的構成」のなかで、「先のラーピン論文の紹介は、『草稿』と『ミル評注』との関係をめぐっておこなわれていたわが国の研究者たちの論争にはからずとも終止符を打つことになった」（雑誌『現代思想』1976年9月号所収、229ページ。力点——引用者）といい、また「……細見もラーピンの考証は『簡潔ながらも手堅いものとして、執筆順序についてはもはや動かし難い結論が出たことを認め、その点に関する限り、この論争には終止符が打たれた」（同上、229ページ。力点——引用者）とも断じておられる。

しかし、執筆順序の問題にかんする山之内氏のこうした「論争」終結宣言にもかかわらず、実際には、中川・細見「論争」の終結後も、「パリ・ノート」と『経哲草稿』をめぐっては（執筆順序の問題も含めて）種々の所説が現われて、いまだに

あとを絶たない、というのが実状であろう。

ところで、こんどは「ラーピン論文」が発表されてから1971年末までに公刊された一連の著書・論文をとりあげることによって、以下われわれは、「ラーピン論文」公表直後にわが国の初期マルクス——とくに「パリ・ノート」および『経哲草稿』——の研究者たちの間にひきおこされた波紋を手短かに見ておくことにしよう。そのさい、山中氏、細見氏および中川氏の所論についてはすでに考察済みなので、これからとりあげて考察対象とするのは、畑孝一、森田桐郎、梅本克己および広松渉の四氏の見解である。

畑孝一氏の見解（「『経済学・哲学草稿』——市民社会の経済学的分析の第一次的形成という視角から——」雑誌『現代の理論』1971年4月号所収）

畑孝一氏は、1971年4月に、旧メガI/3で公表された『経哲草稿』にかんして、「『草稿』は全体が三つの草稿からなり、その第1草稿は、前半の、マルクス自身によって名づけられた『労賃』『資本の利潤』『地代』という三つの部分と、後半の、後に編集者によって名づけられた（以下同様）『疎外された労働』からなっている」と述べたあと、\*印の個所に次のように自注しておられる。

「この部分は、マルクスの原稿では、ノートが二本の縦線を引いて三つの欄に分けられ、左から右へそれぞれ前述の表題がつけられたところへ書かれたものである。従来われわれは、このことを重視せず、邦訳書の順序で『労賃』から読みすすむのが普通であった。しかし、マルクスの思考の歩みを追うには、このような読み方が不適切であることが、N. I. ラーピンの研究（『マルクスの『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析』）から明らかにされた。すなわち、マルクスは所得の三源泉の研究を平行してすすめていき、ある問題ごとに『資本の利潤』『地代』『労賃』の順に書いていったのである」（前掲誌、63—64ページ、力点——引用者）。

このように畑氏は、「N. I. ラーピンの研究」のメリットを認めて、『経哲草稿』の「『労賃』から読みすすむ」「従来」の「普通」の「読み方」は「マルクスの思考の歩みを追うには」「不適切」であるとされたわけである。そして氏は、さらにつづけて、「なお、ラーピンの研究には、……細見英氏の詳しい紹

介（『経哲草稿』第1草稿の執筆順序——N. I. ラーピン論文の紹介——）『立命館経済学』19巻3号）があり、筆者も利用させていただいた。とくに(一)(二)は主にラーピンの研究に依拠してまとめたものである（同上、64ページ）と書かれた。

こうして畑孝一氏は、はやくから「ラーピン論文」に注目し、自説の展開にさいしても「ラーピンの研究」に「依拠」されたのであった。だからわれわれは、畑氏の場合、ラーピンの所説がほぼ全面的に支持されていたと見て差し支えないであろう。

**森田桐郎氏の見解**（『ジェームズ・ミル評注』——市民的ゲゼルシャフトの批判的・経済学的認識の形成（上）、『現代の理論』1971年5月号所収）

森田桐郎氏は、われわれがすでに見た中川弘氏の『経哲草稿』先行説について次のように述べられる。——「中川氏は、ミルへの言及は『経哲』第2草稿において、それからの引用は第3草稿において、はじめてあらわれることに注目し、執筆順序はむしろ『経哲』第1草稿→『ミル評注』→『経哲』第2、第3草稿と推論される、と指摘されている。そして、ごく最近、基本的には中川氏の推定を支持する有力な研究が出現したのである。それは、ソ連邦の初期マルクス研究者 N. I. ラーピンの労作『マルクス「経済学・哲学草稿」における所得の三源泉の対比的分析』である」（前掲誌、8ページ）。

このように森田氏は、中川氏の『経哲草稿』先行説が「ラーピン論文」の公表によって「支持」されたと指摘したのち、ひきつづき、「細見英氏によって紹介・翻訳されたラーピン論文は、直接には、『経哲』第1草稿前半部分（労賃、資本の利潤、地代）の執筆順序の考証を目的としたものであるが（それ自体きわめて重要かつ興味深いものであり、従来の『経哲』研究に重大な反省をせまるものである）、『1844年におけるマルクスの経済学研究の段階区分』についても注目すべき指摘をおこなっている」（同上、8—9ページ参照）と評して、われわれが以前にかかげた、「マルクスの経済学研究の歩み」にかんするラーピンの「段階」=および「階程」区分のシェーマを示される。そして、そのあと森田氏は、さらにすすんで次のように論述される。「……以上のようなラーピンの結論は、推論にとどまるとはいえきわめて説得的であり、執筆順序の問題につ

いては自説を撤回されてラーピンに従うことを表明された細見氏とともに、筆者もまた、今後有力な反証があらわれるまでは、この考証に全面的に従いたいと考える。それは、……このように理解してはじめて、この段階におけるマルクスの市民社会認識を——その後の発展・成熟とももちろん関連させつつ——最も正しく把握することが可能と考えるからである。また、従来の『経哲草稿』、とくにその『疎外された労働』の誤まった理解を払拭することができるからである」（同上、9ページ。力点——引用者）。

見られるとおり、森田桐郎氏もまた、ラーピン説は「推論にとどまるとはいえずわめて説得的」であるとして、執筆順序の点では——「今後有力な反証があらわれるまでは」という条件をつけながらも——細見氏と同様、ラーピン説を「全面的に」支持することを表明されたのであった。

なお森田氏は、執筆順序の問題を『経哲草稿』の「読み方」とかかわらせながら、つぎのように強調しておられる。「……以上の一見好事家的詮索のようにみえる『抜粋ノート』、とくに『ミル評注』と『経哲草稿』との執筆順序の考証は、つぎのような重要な結論にわれわれをみちびく。すなわち、1844年段階の、市民社会の批判的認識のための独自の視角と方法を形成しつつあったマルクスを正しく把握するためには、少なくとも、『経哲』第1草稿→『ミル評注』→『経哲』第2、第3草稿という読み方をしなければならないということ、したがって『ミル評注』を無視した『経哲草稿』研究は妥当性をもちえないのであり、とくに『経哲』第1草稿中の『疎外された労働』のみを他からきりはなして取扱うことはマルクス疎外論の曲解・歪曲に通じるということ、である」（同上、9—10ページ。力点——森田）。

このように森田氏は、「『抜粋ノート』、とくに『ミル評注』と『経哲草稿』との執筆順序の考証」からすれば、「『経哲』第1草稿→『ミル評注』→『経哲』第2、第3草稿という読み方」が要請されるという点、だからまた、『ミル評注』などを無視して「第1草稿」後段の「疎外された労働」論だけを孤立的にとりあげる場合には「マルクス疎外論の曲解・歪曲」に陥ることになる、という点を力説されるのだが、氏のこうした所説はまさしく当を得たものとい

うべきであろう。

**梅本克己氏の見解**（同氏著『唯物史観と経済学』現代の理論社、1971年11月）

梅本克己氏は上記著作の冒頭で、「マルクスの経済学批判の出発が『経済学・哲学草稿』にあることは誰も知るとおりであるが、『草稿』のマルクスが、まず労賃・資本利潤・地代にたいする考察から始められていることを私たちはとかく軽く見すごしがちである。最近の考証は、右〔上〕の三項目の分析過程にたえず往復と進展があったことを明らかにしているが」（前掲書、5ページ）云々と述べ、さらに、われわれが\*印をつけたところに、氏自身、つぎのように註記しておられる。

「細見英訳 N. ラーピン『マルクス「経済学・哲学草稿」における所得の三源泉の対比的分析』（『思想』1971、3月号）参照。『草稿』の内容と密接な関係にある『経済学ノート』（杉原四郎、重田晃一訳未来社）についていえば、日本でもすでに詳細な研究が出ているが、だいたいのところ、『疎外された労働』についての断章をもつ第1草稿と、第2、第3草稿との間に、『経済学ノート』第4、第5ノート（リカード、ジェームズ・ミル、マカロックらからの抜粋と評注）が位置するのではないかという推定に落ちつくようである。私もこの見解に従いたい」（同上、11—12ページ。力点——引用者）。

このような叙述からわれわれは、梅本克己氏が、「ラーピン論文」における「考証」の正当性を認めたいと、執筆順序は「ノートⅠ」～「ノートⅢ」→「第1草稿」→「ノートⅣ」、「ノートⅤ」→「第2草稿」、「第3草稿」だ、というように解されていたと読みとることができよう。いいかえれば、梅本氏も「だいたいのところ」「ラーピン論文」を支持しておられたわけである。

**広松渉氏の見解**（『青年マルクス論』平凡社、1971年12月）

広松渉氏は、「パリ・ノート」とくに「ノートⅠ」～「ノートⅢ」について次のように論じておられる。——「評注ぬきの抜粋集というスタイルは、ベルリン時代のノートや『経済学ノート』のⅣ以下と比べて異貌であるが、これはまた、虚心坦懐さの現われとのみは言い切れない。逆に、資料蒐集的な態度の現われとみることすら可能である。現にマルクスは、ノートⅠ・Ⅱ・Ⅲを作製

した時点で、いちはやく『経哲手稿』に転じている。／マルクスがもし、経済学の勉強にしばらく“専念”しようとしたのであれば、セーとスミスを読んだところでいったん打ち切ってしまったというのは、いかにも合点のいかぬ話である。リカードをすら読まぬうちに……という言い方をするつもりはないが、『経哲手稿』は単なるノートではなく明らかに著作作用の原稿として起稿されたものであり、そこでは早速にノートⅠ・Ⅱ・Ⅲが大いに利用されている」（『青年マルクス論』207—208ページ。力点——広松）。

広松氏はまた、「マルクスは、セーの『経済学概論』とスミスの『国富論』を中心に三冊のノートを作ったあと、いちはやく『経哲草稿』の執筆に着手したのであったが」（同上、220ページ）云々とも述べておられる。

このように言われる場合、広松氏は『経哲草稿』全体をではなくて、その「第1草稿」を念頭に置いているのであって、このことは、氏が「第1草稿」と「第2草稿」とのあいだには「ノートⅣ」および「ノートⅤ」が介在することを明言して、たとえば「このⅣ・Ⅴは『経哲草稿』の第1手稿と第2手稿との中間の時期に執筆されたとみられる」（同上、235ページ。力点——引用者）といい、また別の個所では端的に「第1手稿のあとに書かれた『経済学ノート』Ⅳ・Ⅴ」について語っている（同上、225—256ページ参照。力点——引用者）ことから知られるところである。つまり広松氏は、「パリ・ノート」と『経哲草稿』の執筆順序にかんするラーピン説を大筋において容認しておられるわけである。<sup>(注)</sup>

（注）ここでは割愛せざるをえないが、広松氏は「第1草稿」前段部分の執筆順序についても「MEGAやN. ラーピンの所説を手掛りにして」立ち入った、興味深い考究をくわえておられる（同上、225—228ページ参照）。

なおまた同氏は、「ノートⅣ」および「ノートⅤ」の内容に言及して、こう論述されている。「『経哲手稿』の第1手稿を経て、ノートⅣ、Ⅴでのリカードやジェームズ・ミルに関連しての評注の時点に至ると、マルクスの批判的コメントは量質ともに一変した様相を呈する。そこには経済学の土俵内での若干の評注が現れるだけでなく、——これは第三者的にみると、多分に夜郎自大的な、後年のマルクス本人もおそらく苦笑したであろうような水準にとどまっているのだが、因みに、ここでのマルクスは先にもみておいたヘーゲルと同様まだ労働価値説をとってはいない

——，国民経済学の思想的構えそのものに対する批判が登場する」（同上，236-237ページ）。

以上，われわれは「ラーピン論文」公表直後（1971年末まで）に限って，わが国における初期マルクスの研究，とくに「バリ・ノート」および『経哲草稿』の研究にひきおこした同論文の波紋を見てきたが，ここでとりあげた畑孝一，森田桐郎，梅本克己および広松渉の諸氏については，程度の差はあるものの，どの論者も「ラーピン論文」を肯定的に評価していたと見てよからう。

ところで，この「ラーピン論文」の波紋は，年の経過とともにますますその輪をひろげてゆくことになった。すなわち，多かれ少なかれ同論文に關説した著書・論文が次から次へと現われたのであった。もとより，そのなかにはエヌ・イ・ラーピンの所説に異を唱えるものも含まれていた。こうして「ラーピン論文」にかんしては，異説をも含む数多くの文献が発表されて現在に至っているわけである。ともあれ，私は，このあたりで本稿での論述を閉じねばならない。